

506

209

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



506-209



ГЕРБЪ РОДА ГРАФОВЪ ТОЛСТЫХЪ,

社 秋 春



## 序 文

『アリベルト』と『ルセルン』は何れも一八五七年作者が外遊中の作である。アリベルトは先年トルストイがベテェルブルグで知りあひになつて、ヤースナヤ・ポリャーナへ連れて來たルドルフと言ふ酒のみの音楽者をモデルにしたものである。『ルセルン』の出來事は、トルストイがその地で實際に遭遇した事件である。『ゲーム取人の手記』は一八五五年一月『現代人』に出た。作者がピチャゴルスクにゐた頃の作で、賭博の誘惑に就いては、自傳的要素を多分に含んでゐると見てよい。

目次

アリベルト..... 1

ルセルン..... 七

ゲーム取人の手記..... 104

アリベルト



阿利貝爾

五人の金持ちの青年が、朝の三時に、愉快な時を過ごすために、ペテルブルグの舞踏會へ出かけた。三鞭酒の壺が澤山抜かれた。紳士たちの大部分は青年であつた。娘たちは美しかった。洋琴家と提琴演奏者が、倦まずにボルカを互ひに弾いた。會話と舞踊の騒ぎは、いつまでも止まなかつた。しかし、そこには、氣拙さと窮屈の或る感覚があつた。誰も彼もが、何かしら、萬事が當然あるべき筈の事とは違つてゐるやうに——そして、それはいつもさうであつた——感じてゐた。物事をもつて陽氣にするために、盡つかの企てが試みられた。か、伴はつた陽氣は、憂鬱よりも餘程悪いものである。

自分自身に對しても、他人に對しても、他の誰よりも不満足を感じ、一晩不愉快を感じてゐた五人の青年の一人は、帽子を取つて、家へ歸るために、態と音をさせずに立去つた。

控への間には、誰もゐなかつたが、その次ぎの間の入口の所で、二つの聲が言ひ争つてゐるのを彼は聞いた。青年は、立止まつて、耳を傾けた。

『そんなことは出来ませんわ。あそこにはお客がゐらつしやるんですもの。』と婦人の聲が云つた。

『さア、入らして下さい。どうぞ。僕は何にも悪い事はしませんよ。』と一人の男が、穩かな聲で言ひ張つた。

『奥様のお許しが無いのにどうして私にそんなことが出来るもんですか。』と婦人が云つた。『何處へあなたはゐらつしやるんです。まア、あなたは何といふ人でせう!』

扉がバツタリ開いた。そして、闕の上に見知らぬ男の姿が現はれた。一人の客を見たので、女中は、その男を引留めるのを止めた。で、見知らぬ男は、臆病にお辭儀をして、やゝふらつく歩調で部屋の中へ入つた。

それは、ヒヨロ長い曲つた背の、長い髪を亂した、中肉中丈の男であつた。彼は、短かい外套を着て、粗末な汚れた長靴の上には、きつちり身體に喰附いた、ほろ／＼の洋袴を穿いてゐた。襟袷が、絢れて絲のやうになつてゐるので、彼の長い白い頸が露はれてゐた。彼の襯衣は汚れてゐた。そして、袖が瘦せた手の上まで垂れ下つてゐた。

しかし、彼の身體はひどく瘦せてゐるにも拘らず、顔には、魅力があつて、美しかった。そして、

生々とした色が、その薄い黒い髻と口髭との下にある頬を蔽ふてゐる位だつた。亂れた眉毛は、後へ撫で附けてあるので、低い、目立つて濟らかな額が露はれてゐた。黒い、元氣のない眼は、落着いて、従順な、優しい表情をもつて、眞直ぐに前の方を見てゐた。その眼の表情は、薄い口髭の下に見える。生々しく、弓形になつた唇の表情と一緒に入を牽附けた。

二三步進んで、彼は立停つて、かの青年の方に振り向いた。そして微笑んだ。彼は、微笑むことが、困難であるのに氣が附いたやうだつた。しかし、彼の顔はその微笑のために輝やいて、青年が何故とも知らずに微笑を返へしたほどだつた。

「あの人は誰だね。」と青年は、見馴れぬ男が、舞踏の續けられてゐる部屋の方へ歩いて行つた時に、低聲で女中に訊いた。

「劇場から来た狂人じみた音楽家でございますよ。」と女中は答へた。「あの人は、時々奥様を訪ねて来るんですよ。」

「何處へ行くんだね。デレソフ。」と、この途端に、誰か客間から呼んだ。

デレソフと呼ばれた青年は、客間に歸つた。音楽家は、その時入口に立つてゐた。そして、その眼が舞踊者たちの上に注がれた時に、彼は微笑と足踏をもつて、この光景がどれほど多くの愉快を彼に與へたかを現はした。

「行つて、又舞踏をやらなにかね。」と客の一人が彼に云つた。音楽家は、お辭儀をして、何か訊ねかけたさうに女主人を見た。

「さア、さア。みなさんがあなたを御招待なすつたのに、何故らつしやらなかつたの。」と女主人が云つた。音楽家の瘦せた、弱々しい顔は、不意に屹とした表情を浮べた。そして、微笑んで、瞬きをして、足を引潜つて歩きながら、彼は、無様に、不恰好に、客間にゐる舞踊者たちと一緒にゐるために歩いて行つた。

四組舞踊の眞最中に、非常に綺麗に、ひどく活潑に踊つてゐた快活な士官が、偶然に音楽家の背を打つた。彼の弱い、疲れた足がその平衡を失つた。で、音楽家は、平均を保たうとして、無駄な骨折をしながら、床の上へ倒れた。

彼が倒れたので、鋭い、堅い響きが生じたにも拘らず、その最初の瞬間に、殆んどみんなが笑つた。

しかし、音楽家は起き上らなかつた。客たちは黙つた。洋琴すらもその音を止めた。デレソフと女主人が、眞先きに俯伏しになつてゐる音楽家に近づいた。彼は、肘を突いて横になつて、悲しげに地上を見詰めてゐた。起して、椅子に腰掛けさせられた時に、彼は、その骨張つた手の素早い動作で、額から髪を後へ撫でつけて、云ひかけられた質問には答へずに、微笑み始めた。

「アリベルトさん！アリベルトさん！」と女主人は叫んだ。「怪我をなすつたの。何處を。それ、あ

「わたしは舞踊をなさらない方がいゝって私が云つたでせう……この人はあんなに弱いんですもの。」と彼女は客に對つて言ひ添へた。「舞踊には、この人の有りつたけの力が要るんですよ。」

「あれはどういふ人ですか。」と或る人が女主人に訊いた。

「お氣の毒な人です。藝術家ですよ。極く面白い青年ですけれど、あの人には、御覽の通り、氣の毒な場合があるんですよ。」

彼女は、音楽家がそこにゐるのを少しも構はずにかう云つた。音楽家は、何かに驚いたやうに突然眼を開いて、心を集中して、彼の周圍に立つてゐる人々に云つた。「全く何ともなかつたんですよ。」と彼は不意に云つて、明かに努力して、椅子から立上つた。

で、何の害をも受けなかつたことを見せるために、彼は部屋の真中に行つて、踊らうとした。が、彼は躊躇した。そして、彼が支へられなかつたら、又倒れたに違ひないのだつた。

誰も彼も、押へ附けられるやうに感じた。みんなが彼を見たが、誰も口を利かなかつた。音楽家の眼容が、再びその生氣を失つた。そして、誰か彼を見てゐるといふことを忘れたらしく、彼は手を膝に當てた。不意に、彼は、頭を掻き、頭へてゐる片方の足を出して、前と同じ無様な身振りで髪を掻き上げて、ヴァイオリン函に近づき、樂器を取出した。

「全く何ともなかつたんですよ。」と彼は云つてヴァイオリンを振つた。「諸君、一寸した音楽をやり

ませう。」

「何といふ奇怪な顔だ！」と客たちが云ひ合つた。

「多分、あの氣の毒な身體の中に大天才が潜んでゐるんだらう。」と客の一人が云つた。

「さうだ、あれは氣の毒な人だ——氣の毒な人だ。」と他の者が云つた。

「何といふ愛すべき顔だらう！……あの顔には何か異常なものがある。」とテレソフが云つた。「あの男を見てゐるやうぢやないか……」

二

アリベルトは、この時、誰にも注意せずに、ヴァイオリンを肩へ上げ、靜かにピアノの方へ近づいて樂器の調子を合せた。彼の唇は、無頓着の表情を浮べてゐた。彼の眼は殆んど閉ぢてゐた。が、彼のヒョロ長い骨張つた脊と、長い白い頸と、曲つた足と、亂れた黒い髪は、奇怪ではあるが、どういふ譯か、全然嘲笑したいやうな外觀を現はしてはゐなかつた。ヴァイオリンの調子を合せた後で、彼は元氣よく諧調を出した。そして頭を後へ傾けて、伴奏をしようとして待つてゐた洋琴家に振り向いた。「憂愁曲、G シャープ」と彼は云つて、屹とした身振りで、洋琴家の方を振り向いた。と、直ぐその後で、屹とした身振りを辯解するかのやうに、彼は優しく微笑んだ。そして、同じ微笑をもつて、



今一度聴衆の方を向いた。

弓を持つてゐた手で髪を掻き上げて、アリベルトはピアノの一方の側に立つてゐた。そして、弓の流れるやうな運動で、絃に觸れた。部屋を通じて、清らかな諧音が流れた。その音は、忽ち全くの沈黙を生ぜしめた。

最初には、不意に燦爛たる光が、聴者一人々々の意識の内面世界を通じて閃いたとでもいふやうであつた。と、直ぐそれに伴ふた主旋の音調が、豊かに、美しく注ぎ出された。

たゞ一つの不協音も、不完全な音調も、聴衆の注意を惹かなかつた。調子全體が明快で、綺麗で、意義に充ちてゐた。誰も彼も、黙つて、顧へる期待をもつて、主旋の發展を追ふた。聴衆が陥つてゐた冗長な、騒々しく陽氣な、深くうつら／＼するやうな状態から、樂音は、不意に、みんなが存在を忘れてゐた世界へと移つた。

或る瞬間に、彼等の靈魂の中に、過去を思ひ耽るとでもいふやうな感情や、何かの幸福の情熱的な回想や、力と榮光に對する無限の憧れや、謙讓と、充されざる愛と、憂愁との種々の感情やが生じた。或る時は、若い悦びの、或る時は激しく絶望的な音調が、自由に交り合つて、快く、力強く、自然に次ぎへ／＼と注ぎ出された。そして、音響はさほど聞えないで、長い間人に知られてはゐるが、今初めて表現される詩の美しい流れとでもいふやうなものが靈魂を通じて注がれてゐるやうであつた。

彼が演奏する音調の一つ／＼で、アリベルトは丈がだん／＼高くなつた。僅かな隔離では、彼は蹴足であるとか、若くは變つた所があるといふやうな風をしてゐなかつた。ヴァイオリンを頸に押へ附け、自分が出す音調を情熱的な注意でもつて聴いてゐるといふ表情で、彼はぶる／＼とその足を動かした。

絃の上へ痙攣を起したやうに曲つてゐる彼の左の手は、その場所で悶絶してゐるかのやうに見え、痙攣的に地位を變へるのは、骨張つた指だけであつたが、右の手は、滑かに、上品に、骨を折らずに動いた。

彼の顔は、完全な、情熱的な悦びで輝やいてゐた。彼の眼は、輝やく鋼鐵のやうな光でキラ／＼してゐた。小鼻は顔へて、赤い唇は、恍惚として少し開いてゐた。

時々彼は頭をヴァイオリンの方へ近く曲けた。彼の眼は殆んど閉ぢられた。そして、その長い鬚毛で半ば影を作つてゐる彼の顔は、純真な幸福の微笑で輝やいた。時々、彼は素早く身體を眞直ぐにして足を踏み換へた。そして、彼の清らかな顔と、彼が部屋ぢゆうに投げかける輝やく眼突とが、誇りと、偉大と、力の自意識でもつて、生々してゐた。一度、洋琴家が間違ひをして、間違つた絃を打つたことがあつた。肉體的の苦痛が、この音楽家の姿全體と顔とに現はれた。彼は、一秒時間止めて、子供らしい怒りの表情で、足踏みをして、叫んだ。「短旋法、あの短旋法だ！」洋琴家は間違ひを訂した。ア

ルベルトは眼を閉ぢて、微笑んで、再び自分自身をも他の何人をも忘れて、幸福さうに自分の仕事に没頭した。部屋の中にもたは誰も彼も、アリベルトが演奏してゐる間は、注意深い沈黙を守つてゐた。そして、音楽だけで生活し呼吸してゐるやうに見えた。

快活な士官は、窓の傍の椅子に動かずに坐つて、眼を床の上にしつと注ぎ、長い、深い溜息をついた。全體の沈黙で畏縮した娘たちは、壁に沿ふて坐つて、時々、満足か又は當惑かを現はす眼付を交換してゐるだけだつた。

女主人の肥つた、微笑んでゐる顔は、幸福で輝やいてゐた。洋琴家は、アリベルトの顔をじつと見詰めてゐた。そして、彼は何か間違ひを仕出來しはしないかといふ氣遣ひを、頭から足までの姿全體に現はしながら、アリベルトに隨つて行つたために全力を盡してゐた。他の者よりも餘計に酒を飲んだ客の一人は、安樂椅子の上に長々と横はつて、自分の感情を漏らすのを怖れて、動かないやうにしてゐた。デレンソフは、異常な感覺を経験した。それは恰度、時々縮まつたり延びたりする氷の帯が、彼の頭を締め附けてゐるかのやうであつた。彼の髪の毛といふ根に意識が與へられたやうな氣がした。冷たい戦慄が、彼の背を走り下つた。喉の中を何ものかどだん／＼高く上つて來た。彼の鼻と口蓋とは、小さな針で一ばいだつた。そして、涙が頬を傳ふて靜かに落ちた。

彼は、身顛ひをして、涙を呑み込み、人に氣附かぬやうに、涙を拭はうとした。が、新しい涙がそれに伴ふて、顔を流れ下つた。何かしら不思議な印象の聯想で、アリベルトのヴァイオリンの最初の音調が、デレンソフを少年の時分に連れて行つた。

早熟な、生活に倦んだ、挫折した男の彼が、不意に、再び、満足した、美しい、幸福に傾るい、何故とも知れず幸福な十七歳の少年になつたやうに感ぜられた。彼は、薄紅色の着物を着てゐた従妹との初戀を想ひ出した。菩提樹の列樹で彼がその戀を初めて打明けたのを想ひ出した。暖かさの不意の接吻の魅力とを想ひ出した。その時二人を圍繞してゐた自然の壯大と謎のやうな不可思議とを想ひ出した。

飛ぶやうに昔に返つた彼の空想の中で、彼女が、無限の希望と、了解し難い願望と、不可能な幸福を可能ならしめんとする明確な信仰との霧の中に、輝いてゐた。あの頃の貴重な瞬間の全體が、交る／＼彼の前に現はれた。それは、飛び過ぎる現在の無意味な瞬間ではなくて、不變の、形になり切つた、耻かしい過去の姿であつた。

彼は、それ等の瞬間を有頂天の悦びで思ひ耽つた。そして、泣いた——時は過ぎ去つてしまつたので、彼がもつと有益にそれを過すことが出來たかも知れないから、(若しその時が今一度彼に與へられたなら、彼はそれをもつて有益に過さなかつたに違ひない。)泣いたのではなくて、時が過ぎ去つてしまつて、再び歸つて來ないから泣いたのだつた。彼の追憶は、骨を折らずにひとりでに發展して行つ

た。そして、その端緒はアリベルトのヴァイオリンであつた。それはかう云つてゐた。「時は過ぎ去つた。永久に過ぎ去つた。お前の力と、愛と、幸福の時代は、永久に過ぎ去つたのだ。そして再び歸つて来ないのだ。過去のために泣き、お前の涙をお流し、今は涙でお前の生涯をお送り、それが、お前のために残つてゐる唯一つの最も善い幸福なのだ。」

次ぎの變調の終りに、アリベルトの顔は清らかになつた。彼の眼は閃いた。汗の大きな清い滴が、彼の頬を流れ落ちた。彼の顔の額の血管は緊張した。身體全體がだん／＼と盛んに揺れた。彼の青白い唇は開いた。そして、彼の姿全體が、快樂に對する情熱的な憧れを現はしてゐた。思ひ切つて、身體全體を揺り動かし、髪を後へ撫で附けて、彼はヴァイオリンを下へ置き、誇り顔な満足と幸福の微笑をもつて、傍觀者たちを眺めた。その時、彼の背は平生の彎曲になり、頭は垂れ、唇はちやんと結ばれ、眼はその光を失つた。そして、彼は自分を馳ぢてゐるかのやうに、おづ／＼と四邊を見廻はして、置きながら、次ぎの間へ行つた。

## 三

何かしら不思議なものが、聴衆全體の上に現はれた。何かしら不思議なものが、アリベルトの演奏に繼いで起つた死のやうな沈黙の中に認められた。それは、誰も彼もその意味をすつかり知りたいた

望んでゐるが、敢てさうするものがないといふやうであつた。

それは、どういふ意味があるのか——この明るく輝やいた暖かな部屋や、光陰ゆい婦人たちや、怡度窓に現はれ初めた暁や、この早い脉搏や、音樂の飛過ぎるやうな音調によつて起された純潔な印象は。しかし、誰も敢てその意味をすつかり知らうとする者はなかつた。それどころか、殆んどすべての者が、新たな感銘が彼等にその正體を現はさなかつた所のものゝ勢力の下に自分たちを住せるのを不可能だと感じて、それに反抗した。

「いや、彼は全くうまく奏つたね。」と士官が云つた。

「素敵だ。」とデレンソフは答へて、密つと袖で頬を拭いた。

「實際、もう歸る時刻だよ。諸君」と安樂椅子の上に寝てゐた紳士が、一寸背延びをして、云つた。「吾々は、彼に何か與らなくちやならないだらう。金を集めやう。」

この時、アリベルトは、たゞ獨り次ぎの間の安樂椅子の上に坐つてゐた。骨張つた膝の上に置いた肘で身體を支へてゐるが、彼は、汚れた、汗の出た手で顔を撫で、髪を掻き上げて、自分自身の幸福な考で微笑んだ。

澤山の集金が出来た。そして、デレンソフがそれを贈るために選ばれた。この事とは別に、かの音樂のために、非常に強く、滅多に經驗したことがない程に動かされたデレンソフは、かの男に何か贈物を

したいと考へてゐたのだつた。

彼を自分と一緒に家へ連れて行つて、彼を養ひ、何處かで身を固めさせやう——語を代へて云へば、彼をその汚れた地位から高めやうといふ考が起つた。

「や、疲れましたかね。」とデレソフが、彼に近づいて云つた、アリベルトは、微笑をもつて答へた。「あなたは、獨創的な才能を持つてお出でますよ。あなたは、眞面目に音楽に身を獻けて、公衆の前で演奏なさるべき筈です。」

「私は何か飲物か欲しいんですが。」とアリベルトは、不意に眼を醒ましたやうに、叫んだ。

デレソフは、彼に酒を持つて來てやつた。と、言樂家は貪るやうに二杯飲んだ。

「實に素敵な酒ですね！」と彼は叫んだ。

「あの憂愁曲は、實にいゝ物ですね。」とデレソフが云つた。

「おゝ、さうです。さうです。」とアリベルトが微笑んで答へた。「ですが、失禮ですが、私は何誰とお話をする光榮をもつてゐるか存じませんが、多分、あなたは伯爵か、公爵でゐらつしやいませうなア。金を少しばかり頂くことは出来ませんか。」と彼は一瞬間語を途切つた。「私は無一文なんです——私は貧乏です。私はそれをあなたにお返へしすることは出来ませんが。」

デレソフは顔を赧らめて、間諷附いて、彼のために集められた金を大急ぎで音樂家に渡した。

「有難うございました。」とアリベルトは金を握つて、云つた。「これから、もつと音楽をやりませう。あなたのお好きだけ演奏いたしますよ。しかし、私は頂きたいものですが、何か飲むものを。何か飲むものを。」と彼は、立上つた時に、繰返へした。

デレソフは、更に酒を彼に與へた。そして、自分の傍へ坐つてくれと彼に乞ふた。

「失禮ですが、打明けて云はして下さい。」とデレソフが云つた。「僕はあなたの才能に非常に心を惹かれたんです。お見受けすると、あなたは悪い境遇にお出でになるやうですね。」

アリベルトは、デレソフを見たり、恰度その時部屋へ入つて來た女主人を見たりした。

「失禮ですが僕はあなたをお助けしたいんです。」とデレソフが續けた。「若し何か御入用でしたら。これから、あなたがゐらして下さい、僕と一緒に暫らく暮らして下さい、僕は非常に嬉しいんです。僕は一人で暮してゐます。で、多分、何かあなたのお役に立つ事が出来ると思ひます。」

アリベルトは微笑んで、返答をしなかつた。

「何故、あなたはこの方にお禮をおつしやらないの。」と女主人が云つた。「それは、あなたにとつては一ばん良い事だと私は思ひますがね——尤も私はお勤めはいたしません。」と彼女は續けて、デレソフの方を振り向いて、警告するやうに頭を振つた。

「實に有難うございます。」とアリベルトは、その濡れた兩手で、デレソフの手を握つて、云つた。

「しかし、これから何か音楽をやりませう。どうぞ。」  
 が、客の残りの者は、もう立去る準備をしてゐた。そして、アリベルトが彼等に云はなかつたので、彼等は控への間へ出て来た。

アリベルトは、女主人に別れの挨拶をした。そして、縁の広い破れた帽子と、冬に對する唯一の防衛物である昨年の夏の短い無袖外套を取つて、彼は、デレソフと一緒に踏段を降りた。

デレソフが、その新しい友だちと一緒に馬車の中に坐り、音楽家が吐き出す不愉快な酒の香と垢の香に氣が附くや否や、彼は自分の取つた手段を後悔し、自分の子供らしい情の弱さと、理性の欠乏を顧みて自分自身を咄ひ出した。尙ほその上に、アリベルトの云ふことは何もかも馬鹿々々しい、卑しい事ばかりであつて、彼は獸のような醜態の狀態に近づいてゐるやうに見えたので、デレソフは不快を感じた。「俺はこの男をどうしやう。」と彼は、自分自身に訊いた。

彼等が十五分馬車を驅ると、アリベルトは黙り込んでしまつて、帽子を脱ぎ、それを膝の上に載せ、そして馬車の隅に寄りかゝつて、軀をかき始めた……車輪は單調に凍つた雪の上を碎き進んで、曉の弱い光は、凍つた窓の中へは殆んど射し込まなかつた。

デレソフは、彼の連れを眺めた。無袖外套で包まれたその長い身體が、彼の傍に殆んど死んだやうに横はつてゐた。大きな黒い鼻のある長い頭が、彼の靴の上で揺れてゐるやうに彼は思つた。が、近

づいてよく見ると、彼が鼻と顔だと思つたのはかの男の髪で、彼の實際の顔はもつと下の方にあることが分つた。

彼は身體を屈めて、アリベルトの顔の特徴を調べて見た。と、彼の眉と、安らかに結んだ口の美が、彼の心を牽附けた。長い夜をまんぢりともしなかつたのと、音楽とのために神経が昂奮してゐたので、デレソフは、その顔を見た時に、彼が先程その片影を捕へたところのかの幸福な世界へと、今一度連れて歸られた。彼は、今一度、幸福で寛大であつた少年の時代を想ひ出した。そして、彼の軀卒を悔めるのを止めた。その瞬間に、彼は心から、温情でもつて、彼を愛し、彼の恩人にならうと堅く決心した。

## 四

翌朝、デレソフが事務所へ行くために眼を醒ました時、彼は、不愉快な驚きの感情をもつて、彼の昔ながらの衝立や、昔ながらの召使や、卓子の上の時計を見た。

「俺は何を見たいと思つてゐたのだ。それが俺を取巻いてゐる平生の物でないとすれば。」と彼は自分自身に訊いた。

と、彼は、かの音楽家の黒い眼と、愉快な微笑を想ひ出した。憂愁曲の樂想や、前夜の不思議な經

験のすべてが、彼の意識へ戻つて来た。しかし、彼は、音楽家を一緒に連れて来た行爲が聰明であつたか、或は愚かであつたかを考へ直ほさうとはしなかつた。着物を着てから、彼は念入りにその日の計畫を考へた。彼は紙を取出して、家のために必要な指圖を書き下し、大急ぎで外套を着、上靴を穿いた。

食堂の傍に行つた時に、彼は入口のところをチラと見た。その顔を枕に埋め、汚れてボロ／＼になつた襦袢を着て、長々と横はつてゐるアリベルトは、前の晩全く無意識のまゝ臥かされた深黄色の安樂椅子の上で、ぐつすりと寝込んでゐた。

デレソフは、何か正しくないことがあるやうに感じた。そのことが彼の心を亂した。『ボリュゾーフスキイの所へ行つて、一日二日グアイオリンを借りて来てくれ。』と彼は従僕に云つた。『それから、この人が起きたら、珈琲をあけて、綺麗な白麻布の襦袢と、何か僕の古い着物を一襲あけてくれ。出来るだけこの人が家に落着いてゐるやうにしてくれ。』

彼が午後家へ歸つた時、デレソフは、アリベルトが家にゐないのを見て、驚いた。

『あの男は、何處へ行つたんだ。』と彼は、従僕に訊いた。

『あの方は、お晝御飯が済むと直ぐお出かけになりました。』と従僕は答へた。『あの方はグアイオリンを持つてお出かけになりました。一時間するとお歸りになるとおつしやつていただきましたが、ま

だお歸りになりません。』

『チョッ！仕様がないなア！』とデレソフが云つた。『何故、お前はあの男を出したんだ、ザハール。』

ザハールは、八年間デレソフに仕へてゐる。ペテルブルグ者の従僕であつた。若い獨身者のデレソフは、自分のしたいと思ふ事を従僕に任せ切らなかつた。そして、彼は、自分のする事なす事に就て、自分の判断を下したのであつた。

『どうして私が、あの方をお引留めすることが出来ませう。』とザハールは時計の飾物を觸りながら答へた。『あの方をお留めしておけとおつしやつていただきましたら、ドミトリ・イワーノウイチ、私にはあの方をお引留めしておくことが出来たかも知れません。ですが、あなた様は、召物のことだけをおつしやつたのでございます。』

『チョッ！煩いなア！じやア、俺が出掛けてからあの男は何をしてゐたんだ。』

ザハールは微笑んだ。

『實際、あの方は、あなた様がおつしやつた通り、本當の藝術家でございますよ。ドミトリ・イワーノウイチ。お眼醒めになると直ぐ、あの方は、マデーラ葡萄酒をくれとおつしやいました。それから、あの方は料理番と私にかなり忙がしい目を見させましたよ。あんな莫迦々々しい……しかし、あ

の方は、本當に面白い性質の方でございますね。私はお茶を持つて行つてあげました。あの方のためにお中食の用意をいたしました。ですが、あの方は、お獨りでは召上りたくないでんで、一緒に傍へ座つてゐてくれと私におつしやるんです。しかし、あの方が、提琴をお奏き始めになつた時には、私はイズレルにもあんな藝術家はたんとないだらうと思ひました。あゝいふ人は、抱へておいてもようございませよ。あの方が『母なるヴォルガを下れば』をお奏きになつた時には、全く泣かせました。どんな物とも比べることが出来ぬほど佳うございましたよ！階上にゐる家中の人が、聴きに私どもの入口へ降りて來ました。

『では、あの男に着物を與つたんだね？』と公爵が訊いた。

『おあけしましたとも、あなた様の一番好い襦袢をあげて、私の外套をお着せしました。あなた様はよくあゝいふ方を助けたいと思召しになりました。あの人は、立派な方でございますよ。ザハールは微笑んだ。『あの人は、あなた様がどういふ御身分か、あなた様には貴顯のお知己があるか、農奴を幾人持つてお出でかなんて私に聞きましたよ。』

『よし、しかし、これから人を遣つてあの男を探さなくつちやならないね。それに、これからは、あの男にはどんな酒でも與つちやいけないよ。さうでないと、お前はあの男に善よりも害を與へることになるからね。』

『全くでございます。』とザハールが同意して、云つた。『あの方は、お見受けするところ、ひどくお丈夫じやございませぬ、此内にも、あの方と同じやうな支配人がゐるたことがございますが……』

すつと以前に、酔拂ひの支配人の話を聞いたことのあるデレンソフは、ザハールにお終ひまで話す暇を與へずに、夜の用意萬端整へておくやうに命じた。そして出掛けて行つて、音楽家を連れ歸るやうに命じた。

彼は、寢床の上へ例れて、蠟燭の燈を消したが、アリベルトのことを考へてゐたので、永い間睡就かれなかつた。

『かういふ事は、友だちの或る者には奇怪しく見えるかも知れない。』と彼は獨言を云つた。『しかし、どれ程俺は、自分以外の人に何かしてやらなかつたことだらう！で、今機會が自ら出來たんだから、俺はその機會に對して誠に感謝すべき筈だ。俺はあの男を他所へはやるまい。俺は、あの男を助けるためには、どんな事でも、少くとも俺に出來るどんな事でもしやう。多分、あの男は、全くの犯人ではない。が、たゞ酒を飲む癖があるだけなんだ。そんな事は、俺にとつてはひどく金の入ることではないんだ。一人の人間がある所では、常に充分二人を満足させることが出来るので。暫らくの間、あの男を俺と一緒に暮らさせやう、そして、あの男のために地位を見つけてやるか、音樂會を開かせやう、あの男を暗礁から救ひ出してやらう。さうして置いて、それから先きがどうなるかをゆつくり

「見やう。」この決心をした後で、自己満足の快い感覚が、彼を襲ふた。

「確かに俺は悪い人間ぢやない、俺が悪い人間からすつと離れてゐると俺は云ひ得るんだ。」と彼は考へた。「俺が自分を他人と比較する時に、俺は善人だと云つても云ひ位なんだ。」

彼が屹度眠りに落ちやうとしてゐた時に、戸の開いた音と、控への間の足音とが、再び彼を眼醒めさせた。「いや、俺はあの男をもつと最格に取扱はうか。」と彼は自分自身に訊いた。「それが一ばんいと俺は思ふ。で、俺はさうすべき筈だ。」

彼は、鈴を鳴らした。

「おい、あの男は見附かつたか。」と彼は、呼ばれて出て来たザハールに訊いた。

「あの方は、氣の毒な、情けない人ですよ。ドミトリー・イワーノウィチ。」とザハールは云つて、意味ありげに頭を振つて、眼を閉ぢた。

「どうしたんだ！ 酔拂つてゐるのか。」

「ふら／＼してゐるんです。」

「ウイアオリンを持つてゐたかね。」

「私を持つて参りました。夫人が私にそれを渡して下さつたんです。」

「よろしい。では、今晚はあの男を俺の所へよこしてくるな、そして、明日何とか事情を拵らへ。」

て、あの男を家から出さう。」

しかし、ザハールが部屋を立去る前に、アリベルトが入つて来た。

## 五

「あなたは、この時間に床へ入るなんてどうしたんですね。」とアリベルトは微笑んで云つた。「僕は又あすこへ行きました。アンナ・イワーノウナ家へ。僕は非常に愉快な晩を送りましたよ。音楽をやりました。いろいろの物語がありました。あすこに、非常に面白い仲間がゐりましたよ。どうか何か一ぱい頂かして下さいませんか。」彼は卓子の上に立つてゐた水の硝子瓶を掴んで、云ひ添へた。「水だけは御免ですよ。」

アリベルトは、前の晩の状態と恰度同じであつた——同じやうに愛すべき、微笑む眼と唇や、同じやうに生々とした、感動に充ちた額や、弱々しい恰好をしてゐた。ザハールの外套は、それが彼のために作られたものゝやうに彼の身體に適合つてゐた。そして、上等の襯衣の清らかな、高い、固く糊の着いた襟は、彼の細りした白い頸に適合つて、彼に不思議に子供々々した、無邪氣な外観を與へてゐた。

彼は、愉快と感謝の微笑を漏らしながら、デレソフの寢床の上に腰かけて、黙つて彼を眺めた。デ



レソフは、アリベルトの眼を見詰めた。と、不意に嘗つて彼自身がかの微笑の勢力の下にあつたのを感じた。眠らうとする願望のすべてが、彼から消え去つた。彼は嚴格であらうとする自分の決心を忘れてしまつた。陽氣になつて、何か音楽を聴いて、朝までアリベルトと打解けて話したいやうな氣がした。デレソフは、ザハールに一罎の葡萄酒と、煙草と、ヴァイオリンを持つて來させた。

「こいつア素敵です。」とアリベルトが云つた。「まだ早うございますよ。一寸した音楽をやりませう。僕は、あなたのお好み次第のものを奏りますよ。」

ザハールは、明かに満足したらしく、ラフィット葡萄酒と、二つの洋杯と、アリベルトが喫ふやうな和かな巻煙草と、ヴァイオリンを持つて來た。が、若主人の命令通りに寢床へは行かずに、彼は巻煙草に火を點けて、次ぎの部屋に坐つてゐた。

「それをやらずに、話をしやうじやないか。」とデレソフは、ヴァイオリンの調子を合はせ始めてゐた音楽家に云つた。

アリベルトは、從順に寢床の上へ腰をかけて、愉快さうに微笑んだ。

「いや、さうしませう！」と彼は、不意に手で額を打つて、不安な好奇心の表情を浮べて、云つた。彼の額の表情は、いつでも彼が云はうとしてゐることを豫言してゐた。「僕はあなたにお尋ねしたいと思つてゐました。」——彼は一寸躊躇した——「昨晚あなたとあそこで御一緒だつたあの紳士はあなた

は……あの人をNと呼びかけてゐらつしやいましたが、あれは有名なNの息子さんでしたか。」

「あれの悴ですよ。」とデレソフは、何故アリベルトが彼に興味を持つてゐるか全く解らずに、答へた。

「さうですか！」と彼は、満足の微笑を浮べて、叫んだ。「僕は、あの人の舉止には何處かしら特に貴族的なところがあるのに直ぐ氣が附きました。僕は貴族が好きです。貴族には、何か華やかな、優美なところがあります。では、あんな奇麗に踊つたあの士官は。」と彼は續けて訊いた。「あの人も、私は非常に好きです。あの人は快活な、高尚な容貌をしてゐました。あの人は、たしか副官N・Nと呼ばれてゐましたね。」

「誰？」とデレソフが訊いた。

「僕たちが踊つてゐた時、僕に衝突つた人ですよ。あれは立派な方に違ひない。」

「いや、彼は馬鹿ですよ。」とデレソフが答へた。

「あ、いや！そんな事はない。」とアリベルトが熱心に云つた。「あの人には、何か非常に愉快なところがあります。それに、あの人は立派な音楽家ですよ。」とアリベルトが附加へた。「あの人は、歌劇の中から何か演りましたね。あんなに好きな人を見たのは久しぶりでした。」

「え、あの男は音楽は上手だ。しかし、僕はあの男の演奏を好かないんですよ。」とデレソフは、

彼の相手と音楽の話をするのを不安に感じながら云つた。「彼は、古典的音楽を知らないで、たゞドニツッチやベルリインを知つてゐるだけです。ところで、あんなものは音楽じゃない。ねえ。君は僕に賛成でせう。じやないですか。」

「あ、いや、いや！失禮ですが。」とアリベルトは穏かな辯護の表情でもつて、答へた。「古い音楽は、音楽です。が、近代の音楽もやはり音楽です。それに近代の音楽は非常に美しいものがありますよ。まア、「ソムナムブーラ」とか、「フリチア」の終曲とか、シヨールバンとか、「ロベルト」とか！僕はよくかう考へますよ。」——彼は、考を纏めてゐるかのやうに、躊躇した。「若しベトローヴェンが生きてゐたなら、「ソムナムブーラ」を聴いて嬉し涙を流すだらうと。あれは何處も彼處もみんな美しいものです。僕はヴァールドとルビニがこゝへ來た時に、初めて「ソムナムブーラ」を聴きました。あの演奏は、聴いておいても無駄じやなかつたですよ。」と彼は、輝く眼で、胸から何物かを投げ出すやうな手振りをして、云つた。「僕はかなり試つて見ましたが、あれはもう一度呼び返へすのは、困難でせうよ。」

「なる程ね、しかし、君は近頃の歌劇をどう思ひますか。」とデレソフが訊いた。

「ボジョはいゝですね、非常にいゝですよ。」と彼は答へた。「言葉で云へぬ程美しい。が、あの女は、僕のことへ觸れない。」と彼は云つて、自分の胸を指示した。「歌手には情熱がなくちやいけません。と

ころが、あの女には情熱がちつとも無いんです。あの女のは楽しくはしてくれませんが、苦みを與へてはくれない。」

「では、ラブラーシュはどうですか。」

「僕は、あの人のバリエで、「セヴィール床屋」を聴きました。あの頃は、彼の獨舞臺でしたが、もう彼も年を老りました。彼は藝術家であり得ない。彼は年を老りましたよ。」

「成る程、年を老つたとしても、彼は諧和曲ではやはり立派なものですよ。」とデレソフは、やはりラブラーシュのことを指して云つた。

「彼が年を老つたと誰が云ひましたか。」とアリベルトは手厳しく云つた。「あの人は年を老る筈がありませんよ。藝術家は年を老る筈がありませんよ。藝術家には、多くのものが必要ですが、最も大切なのは火です。」と彼は、眼を輝やかして、空中に兩手を揚げて、云つた。で、實際、すさまじい内部の火が、彼の身體全體を通じて燃えてゐるやうに見えた。「あゝ、さうだ！」と彼は不意に叫んだ。「あなたは、ベトロフを御存じぢやありませんか、御存じですか——ベトロフを、藝術家を。」

「いや、僕はあの人を知りません。」とデレソフが微笑んで云つた。

「あなたと彼がお知己になることが出來たら、どんなにいゝでせう！あなたは、彼と話をすることを喜びになりますよ。どんなに彼は藝術を理解してゐるでせう。彼と私は、度々アンナ・フェドロウ

ナの家でよく會ひましたがね、この節じやアあの女はどういふ理由か彼を嫌がつてゐるんです。しかし、僕は本當に、あなたが彼と知合ひになることを望みます。彼は非常に偉大な才能をもつてゐますよ。」

「おゝ！あの人は書を描くんですね。」とデレソフが訊いた。

「僕には解りません。いや、僕はさうは考へません。が、彼は美術院の美術家でした。何といふ思考を彼は持つてゐるのでせう！彼が話をするといつても、驚嘆すべきものがありますよ。おゝ、ペトロフは偉大な才能を持つてゐます。たゞ彼は非常に楽しい生活をしてゐます。それが甚だ可くない。」とアリベルトは、微笑んで云つた。次ぎの瞬間に、彼は寢床から立上つて、ヴァイオリンを持つて、奏き始めた。

「君は、近頃歌劇へ行きましたか。」とデレソフが訊いた。

アリベルトは、周囲を見廻はして、溜息をついた。

「いや、僕は行けないんです！」と彼は頭を掻きながら、云つた。彼は再びデレソフの傍に坐つた。「あなたに打明けますがね。」と彼は殆んど囁くやうに言葉を續けた。「僕は行けないんです。僕はあそこで演奏することが出来ないんです。僕は何にも持つてゐません。全く何にも——着物も、家も、ヴァイオリンも。それは悲惨な生活ですよ——悲惨な生活ですよ！」彼は同じ文句を繰返へした。さう

です。では、何故僕はこんな状態になつたのでせう。何故、實際。こんなになる筈がないんです。」彼は微笑んで云つた。「あゝ！ドン・ジュアンよ。」

そして、彼は自分の頭を打つた。

「さア、何か喰べやう。」とデレソフが云つた。

アリベルトは、それには返答をせずに跳び上つて、ヴァイオリンを掴み、「ドン・ジュアン」の第一幕の終曲を奏き始めたが、それに伴つて歌劇の場面の敘述が現はれて來た。

デレソフは、アリベルトがかの死にかゝつてゐる司令官の聲を奏いた時に、頭の上で髪が立つのを覺えた。

「いや、今晚は奏けません。」とアリベルトは樂器を下へ置いて云つた。「僕は飲み過ぎました。しかし、直ぐその後で、彼は卓子に近づいて、葡萄酒を洋杯へ縁一ぱい充して、それを一息に飲んだ。そして、再びデレソフの傍の寢床の上に腰掛けた。

デレソフは、凝つとアリベルトを見詰めた。アリベルトは、時々微笑んだ。そして、デレソフは、微笑み返した。二人とも黙つてゐるが、眼容と微笑は、二人を近づけて、互ひに愛の情を起させた。デレソフは、断えず、だん／＼この男が好きになるのを感じ、言ひ現はし難い愉快を経験した。

「君は、戀をしたことがありますか。」と彼は不意に訊いた。アリベルトは、二三分間、考へに沈み込

んでゐた。と、不意に彼の顔が悲しげな微笑で輝やいた。彼はデレソフの方へ身體を屈めて、彼の眼を凝つと見た。

『何故あなたは僕にそんなことを訊くのですか。』と彼は囁いた。『が、僕は僕の戀をあなたにすつかり打明けませう。僕はあなたが好きなんですよ。』と彼は、二三秒間考へてから言ひ添へて、あたりを見廻はした。僕は嘘をつきませんよ。すつかり、有りの儘を、初めからお話しませう。』彼は言葉を切つた。と、彼の眼は、不思議な、荒々しい表情を浮べた。『御存知の通り、僕は、判断力が乏しいんです。』と彼は突然云つた。『さうです。さうです。』と彼は續けた。『アンナ・イワーノウナは、僕にさう云ひました。あの女は、誰にでも、僕は狂人だと云ふんです。それは嘘だ。あの女は戯談にさう云つてゐるんです。あの彼は善良な婦人です。しかし、僕は、實際、暫らくの間、あの女とすつかり具合が悪くなつてゐるんです。』アリベルトは、再び言葉を切つた。そして、立上つて、パツチリ眼を開いて、暗い入口を見詰めた。『僕が戀をしたことがあるかとお訊きになつたんですね。さうです。僕は戀をしたことがあるんです。』と彼は囁いて、その肩を揚げた。『それは、すつと以前のことでです。それは、僕がまだ劇場で地位をもつてゐた時分のことです。僕は、歌劇で第二ヴァイオリンを奏きに行きました。その女はバルケット・ボックス（譯者註——オーケストラの左方にある階下のボックスを云ふ。）へ來たのでした。』

アリベルトは立上つて、デレソフの耳へと身を屈めた。『いや、可けない。』と彼は云つた。『どうして僕は彼女の名前が云へませう。あなたは多分彼女を御存知です。誰でも彼女を知つてゐます。僕は何にも云はずに、たゞ彼女を見ただけでした。僕は、貧しい藝術家だし、彼女は貴族的な婦人であることを僕は知つてゐました。僕にはその事が非常によく解つてゐるのです。僕は、彼女を見たとだけで、何の考も起しませんでした。』

アリベルトは、彼の追憶を確實にするだけでもいふやうに、一瞬間言葉を切つた。

『どうして、さういふ事になつたか、僕には解りませんが、一度僕は、ヴァイオリンで彼女の伴奏をするために、招待されました……で、僕は貧しい藝術家に過ぎなかつたのです！』と彼は繰返へして、頭を振つて、微笑んだ。『いや、可けない。僕にはお話が出来ません。僕には出来ません！』と彼は叫んで、再び頭を扼むだ。『僕はどんなに幸福だつたでせう！』

『どうしたんです？君はその人の家へ度々行つたんですか。』とデレソフが訊ねた。

『一度です、一度ツ限りです……ところが、それが僕の過失だつたんです。僕は精神がちやんとしてゐなかつたんですね。僕は貧しい藝術家だが、その人は貴婦人です。僕はその人に話をする筈じゃアなかつたんですよ。しかし、僕は氣が變になつて、馬鹿な行爲をしました。ペトロフは僕に本當の事を云ひましたよ——「劇場で彼女を見たとけにして置く方がよかつたんだ。」ツてね。』

「君は何をしたんですか。」とデレソフが訊いた。

「あゝ！待つて下さい。待つて下さい。それが僕には話せないんです。」

で、手で顔を隠して、彼は暫らくの間何にも云はなかつた。

「僕が夜遅くオーケストラにゐました。ベトロフと僕はその晩飲んでゐました。で、僕は帰着してゐました。その女は、柵に坐つて、或る將官と話をしてゐました。僕はその將官が誰だか知らなかつたんです。僕は、柵の一ばん端に坐つて、縁へ腕を載せてゐました。白い着物を着て、頸に眞珠の頸飾を着けてゐました。女は將官と話をしてゐたのですが、僕を見ました。二度僕を見ました。女は、自分の髪をこんな風に具合よく整してゐるんですよ！僕は奏くのやめて、低音奏者の近くに立つて、彼女を見詰めました。その時、初めて、何か變なものが僕の心の中に起つたのです。女は、將官に對つて微笑みかけてゐました。しかし、僕を見ました。僕は、確かに女が僕と話をしやうとしてゐるやうな気がしました。と、突然、オーケストラの自分の場所にはゐないと思つてゐるうちに、僕は女の柵に立つて、そこで彼女の手を握つてゐました。一體どういふ譯でそんなことをしたのでせう。」とアリベルトは、一瞬間沈黙した後で、訊いた。

「非常に強い想像力なんですよ。」とデレソフが云つた。

「いや、いや……僕には話せません。」とアリベルトは顔を擧めて、云つた。「その頃でも、僕は貧乏

でした。僕には自分の部屋がなかつたんです。で、劇場に行くと、時々、よくそこで寝ました。」

「何ですつて、劇場で？」とデレソフが訊いた。

「あゝ！僕はそんな馬鹿な事を何とも思はないんですよ。あゝ！一寸待つて下さい。みんなかゝるようになる、僕は、女が坐つてゐたその柵へ行つて、そこで寝るんです。それが僕のたゞ一つの快樂でした。どんなに幾晩も幾晩も、僕はそこで眠つたことせう！たつた一度でいゝから、もう一度あんな經驗をして見たいものです。夜中に、いろんな事が僕に起つて来るやうな気がしたんですよ。しかし、そんな事は、あんまり僕にはお話し出来ませんよ。」アリベルトは眉を擧めて、デレソフを見た。

「全體僕はどうしたといふんでせう。」と彼は訊いた。

「不思議でしたね。」とデレソフが答へた。

「いや、待つて下さい。待つて下さい！」彼はデレソフの耳へ身體を屈めかけて、低聲で云つた——

「僕は、その女の手に接吻をして、女の前で泣いて、彼女にいろんな事を云つたんですよ。僕は、女の吐息の香を聞きました。僕は女の聲を聴きました。彼女は或る晩私にいろんな事を云ひました。で、僕はヴァイオリンを取つて、靜かに奏きだしました。そして、僕の演奏は美しかつたですよ。しかし、それが僕に怖くなりだしたんです。僕はそんな馬鹿な事を怖れてはゐませんし、それを信じもしませんが、僕の頭が恐怖を感じだしたんです。」と彼は云つて、優しく微笑んで、額の前で手を動か

した。「僕の精神が貧しいために、そんな事が怖く見えただですよ。僕の頭の中へ何事か起つたんですね。多分、そんな事は何でもなかつたんでせうよ。あなたはどうぞお思ひになりますか。」二人とも、五六秒の間、口を利かなかつた。

「よし雲それを蔽ふとも、

太陽は永久に照々と輝きてあるべし。」

と、アリベルトは、優しく微笑みながら、口ずさむだ。「眞實ですよ、ねえ。」と彼は訊いた。

「われもまた、生きて、

樂みてありき。」

「あゝ、老ベトロフよ！僕の今云つた事が、どれだけあなたに明瞭お解りになつたでせう！」

デレソフは、黙つて、驚ろいて、相手の昂奮した、色を失つた顔を眺めた。

「あなたは、ユリステンのワルツを御存知ですか。」と突然、アリベルトは聲高に訊いた。そして、返答を待たずに、跳び起つて、ヴァイオリンを擱んで、ワルツを奏め始めた。同く自分を忘れ、管絃樂合奏部全體が、彼のために演奏してゐるのだと考へてゐるかのやうに、アリベルトは微笑して、踊り出し、足を引摺り、非常に立派に奏いた。

「さア、愉快な時間を過しませう！」と彼は、ワルツを止めた時に、呼んで、ヴァイオリンを振つ

た。「僕は出かけますよ。」と彼は、暫らく黙つて坐つてゐた後で、云つた。「あなたもゐらつしやいませんか。」

「何處へ。」とデレソフが驚いて尋いた。

「もう一度、アンナ・イワーノウナの家へ行きませう。あそこは陽氣ですよ——雑踏、人群り、音樂。」

デレソフは、一瞬間の間、殆んど従はせられやうとした。しかし、彼は正氣に返つて、明日一緒に行かうとアリベルトに約束した。

「僕は、たつた今行きたいんです。」

「實際、僕は行きたくないんだ。」

アリベルトは、吐息をついて、ヴァイオリンを下へ置いた。

「僕も家にゐませうか、じやア。」彼は卓子の上を見た、しかし、葡萄酒は無くなつてしまつてゐた。で、就寢の挨拶をして、彼は部屋を立去つた。

デレソフは、鈴を鳴らした。「おい。」と彼はザハールに云つた。「アリベルトさんが僕に訊かずに何處へも行かないやうに氣を附けてくれ。」

翌日は、休日だった。テレンソフは、眼を醒ますと、客間に坐つて、珈琲を飲み、書物を読んでゐた。次ぎの間にゐたアリベルトは、まだ起きなかつた。ザハールは、密ツと戸を開けて、食堂の中を見た。「驚きましたね、ドミトリイ・イワーノウイチ、あの方は、あすこで、安樂椅子の上へ直かに寢んで見えますよ。どんな事があつたつて、あの方を他所へ遣りたくはありませんよ、本當に。あの子は、小ちやな子供のやうでございませぬえ。本當に、あれは藝術家ですよ！」

十二時に戸の向側で欠伸と咳の音がした。

ザハールは、再び食堂へ密ツと入つて行つた、で、若主人は、彼の機嫌を取る聲と、アリベルトの静かな、懇願するやうな聲とを聞いた。

『どうしてゐるね。』とテレンソフは、ザハールが出て来た時に訊いた。

『元氣がありませんよ、ドミトリイ・イワーノウイチ。着物を着換へたくもないんださうでございませぬ。ひどく御機嫌がわるいんです。何でもかでも何かお酒を呉れとおつしやるんです。』

『いや、彼の身を安らかにしやうとするには、彼の品性を強めなければならぬ。』とテレンソフは、心の中で云つた。で、酒を與へることをザハールに禁じて、彼は再び書物に心を集中した、しかし、

さうしながらも、断えず食堂ではどうなることかと耳を傾けてゐた。

けれども、そこでは、たゞ時々重い胸から出る咳と唾を吐く音がするだけで、何事も起らなかつた。二時間経つた。テレンソフは、外出するために着物を着換へてから、彼の客に一寸會はうと決心した。アリベルトは、窓の傍で、両手で頭を支へて、凝つと坐つてゐた。

彼は振り返つて見た。彼の顔は、瘦せて、澁面を作つて、陰鬱であるばかりではなく、ひどく悲しげであつた。彼は、微笑で家の主人を迎へやうとした、ところが、彼の顔が、もつと悲みに沈んだ表情になつた。それは泣き出さうとしてゐるかのやうに見えた。

やつとの事で、彼は立上つて、頭を下けた。「小さな洋杯で、たつた一杯火酒が貰へたら、どんなに嬉しいでせう。」と彼は哀願するやうな表情で叫んだ。「僕は、本當に弱つてゐるんです。どうか！」

『力附くには、珈琲の方がいゝでせう、ねえ君。』

アリベルトの顔は、その子供らしい表情を失つた、彼は、冷やかに、悲しげに、窓の外を眺めた、そして、椅子へドツカリ腰を下ろした。

『君は朝飯が喰べたくないんですか。』

『いや、有難たう、僕は食慾がないんです。』

『若しヴァイオリンが奏きたいんなら、僕はちつとも構ひませぬよ。』とテレンソフは、卓子の上へ樂

器を置いて云つた。アリベルトは、嘲笑的な微笑で、ヴァイオリンを見た。

「いや、僕はすっかり弱つてゐるんです、僕は奏けませんよ。」と彼は云つて、楽器を押し戻した。それから、散歩に行かうとか、夕方劇場へ行かうとか、その他いろいろのデレソフの申出でに對して、彼はただその頭を悲しげに振るだけで、話すのを嫌つた。

デレソフは外出して、二三軒訪ねて、外で中食をしたが、劇場の始まる時間の前に、着物を着換へるために自分の部屋へ歸つて、音楽家がどうしたかを見た。

アリベルトは、暗い控への中に坐つて、片手で頭を支へて、熱してゐる暖爐を見詰めてゐた。彼は小綺麗な着物を着て、顔を洗ひ、髪を梳つてゐるが、その眼は、悲しげで、キョトンとしてゐた、そして、その姿全體が、朝よりももつと力無けで、衰弱してゐるやうに見えた。

「やあ、君は晝飯をやりましたかね、アリベルト君。」とデレソフが訊いた。

アリベルトは、黙頭いて、デレソフを恐怖えたやうな表情で見て、眼を伏せた。その表情は、デレソフに不快を感じさせた。

「僕は、今日支配人に話をしましたよ。」とデレソフも眼を伏せて、云つた。「支配人も、君が勤めて下さるんなら、喜んでお約束するさうですよ。」

「有難う、しかし、僕には奏けません。」とアリベルトは、殆んど嘔くやゝに云つた、そして、彼は

自分の部屋へ入つて、出来るだけ靜かに戸を閉めた。二三秒経つと、出来るだけ靜かに空錠を排して、彼は部屋からヴァイオリンを持つて出て來た。デレソフに對つて、鋭い、腹立たしげな眼付を投げかけながら、彼は卓子の上に樂器を置いた、そして、再び立去つた。

デレソフは、肩を揺つて、微笑んだ。

「さあ、俺はどうすればいいかな。俺には何處か悪い所があるのか。」と彼は自分自身に訊いた。

「さあ、音楽家は どうしてゐるかな。」といふのが、彼がその晩遅く家に歸つた時の最初の疑問であつた。

「可けません。」と、ザハールは、簡單に、聲高に答へた。「あの人は、始終溜息をついて、咳をして、四五度火酒をくれとおつしやつただけで、何にもおつしやらないんです、で、一度お酒を上げました。こんな風では、あの人を殺してしまひますが、どうしたものでございませうねえ、ドミトリイ・イワーノウイチ。支配人もやつぱりあんな風でございましたよ……」

「で、あの男は、提琴を奏かなかつたかね。」

「觸りもしません。私は提琴を持つて行きました、二度——すると、靜かに手に持つて、脇へやつてしまふんです。」とザハールは微笑して、云つた。「やつぱりお酒を上げては悪うございますかな。」

「今日は何にも與らない方がいゝ、どうなるか結果を見やうよ。今は何をしてゐるね。」



「客間に閉ぢ籠つてゐらつしやいます。」

デレソフは、圖書室に行つて、二三冊の佛蘭西の書物と獨逸語の聖書を取出した。「この書物を、明日、彼の部屋へ入れて置いてくれ、そして、監視をして、家を出さないやうにしてくれ。」と彼はザハールに云つた。

翌朝、ザハールは、音楽家は終夜まんぢりともしなかつたと、若主人に告げた。「あの人は、始終部屋を彼方此方歩いて、脇棚の方へ行つて、膳棚や扉を開けやうとしてゐました、でも、何もかも錠がかゝつてゐるので、骨を折つても駄目だったのでございますよ。」

ザハールは、自分が寝やうとしてゐる間、アリベルトが、暗がり、身振りをしてぶつ／＼獨言を云つてゐたことを話した。

\* \* \* \* \*

アリベルトは、日に日に陰鬱に、無口になつて行つた。彼は、デレソフを恐れてゐるかのやうに見えた、で、二人の眼が會ふと、いつでも、彼の顔は、苦痛に充ちた恐怖を現はした。彼は、書物やグアイオリンに觸りもしなかつた、そして、自分に問ひかけられる質問には少しも答へなかつた。

音楽家が家へ泊るやうになつてから三日目に、デレソフは、夜遅く、疲れて、むしやくしやして、

家に歸つた。彼は、終日自分の任務を果たすために事務を執つたのだつた。その任務は簡單で、容易く見えたが、ひどく骨を折つたにも拘らず——そんな事は屢あるのだが——少しも進捗しなかつた。その後で、彼は俱樂部に止まつて、ネイスト（譯者註——一種の骨牌戲）で負けた。彼は不機嫌であつた。

「じやア、彼は一體どうなるんだ。」と彼は、アリベルトの惨めな状態を彼に話したザハールに答へた。「明日は、本當にあの男のことで苦むんだ。あの男は、僕と一緒にゐて、僕の忠告に従はうとしてゐるんだらうか、それとも、さうしたくないんだらうか。さうしたくないんだ。それでは、怠惰といふものだ。僕は自分に出来る最善を盡したんだからね。」

「他人のために恩人にならうとするのは、こんなものなのか。」と彼は自分自身に云つた。「俺は、自分のためにあの男に不自由を感じさせてゐるんだ。俺は、あの穢い人間を、朝は他人を容れない俺の部屋へ連れて來た、俺は仕事をして、歩き廻つてゐるんだ、それは、彼は、俺を、彼の意志に逆らつて彼を欄の中へ入れやうとしてゐる敵のやうに見做してゐるんだ。が、一ばん悪いのは、自分自身のために一步を踏み出さないことだ。それが、あゝいふ連中全體の遣り方なんだ。」

全體といふその言葉は、一般の人々、殊に彼がその日事務のために交はつた人々を指したのでつた。「しかし、これからあの男のためにどうすればいいのか。彼は何と考へてゐるのか。何故彼は悲し

けなのか。俺があつた男を放埒から救めたために悲しげなのか。彼が沈んでゐた墮落の淵から救つたために悲しげなのか。屈從から彼を救つたために悲しげなのか。純潔な生活を見るのが彼には重荷になつたほど、彼が墮落したといふやうなことが、有り得やうか……」

「いや、これは子供らしい行爲だ。」とデレソフが考へた。自分自身の事を處置するだけで、俺にとつては充分の仕事であるのに、何故俺は他人を導かうとしなくてはならないのか。彼を直ぐに、放さうとする衝動が、直ちに彼の心の中に起つた、が、一寸考へて、彼は翌朝までそれを延ばすことにした。

夜中に、デレソフは、控への中で、卓子の倒れる音と、人聲とバタ／＼いふ足音とに眼が醒つた。「一寸待つて下さい、ドミトリー・イワーノウィチに伺つて來ますから。」とザハールの聲が云つた。アリベルトは、熱した、軽々しい聲で答へてゐた。

デレソフは、跳び起きて、蠟燭を持つて、控への間へ行つた。寢衣を着たザハールは、戸口に立ち塞がつてゐた、帽子を冠り短い無袖外套を着たアリベルトは、彼を引張り徐げやうとして、彼に對つて感傷的の聲で叫んでゐた。

「君には僕を引留める権利がないんだ、僕は旅券を持つてゐる、僕は君たちの物を何一つ盗んだ譯じやアないんだ。僕は警察へ行くんだ。」

「どうか、ドミトリー・イワーノウィチ。」とザハールは、若主人の方を向いて、やはり入口に立塞がりながら、云つた。この人は、夜中に起き上つて、私の外套の衣釧から鍵を見附けだして、甘い火酒を一壺飲んでしまつたんです。そんな事をして善いではやうか。それに、これから出掛けたいとおつしやるんですよ。あなた様がお指圖をなさいませんでしたから、私はこの方をお出し申すことが出來ないんでございます。」

アリベルトは、デレソフを見ると、前よりも一層激しくザハールを引張り始めた。「誰も僕を引留める権利はないんだ！彼は引留めることは出來ないんだ。」と彼は、だん／＼聲を張り上げて叫んだ。

「行かせなさい、ザハール。」とデレソフが云つた。「僕は君を引留めたいとは思はない、僕は引留める権利を持たないんだ、が、僕は君に勧める、明日まで待ちたまへ。」と彼は、アリベルトに對つて云つた。

「誰も僕を引留める権利はない。僕は警察へ行くんだ。」とアリベルトは、デレソフには構はずに、ザハールだけに對つて、だん／＼激しく叫んだ。「監視！」と彼は突然有らん限りの聲で叫んだ。

「いや、何のためにあなたはそんなにお怒鳴りになるんです。ねえ、あなたは御自由にお出掛けになつていゝんですよ。」とザハールは、扉を開けて云つた。

アリベルトは、怒鳴るのを止めた。「奴等はひどい事をしたもんだ。奴等は俺を殺しかけてゐたん

だ！いや！」彼はぶつ／＼獨言を云つて、表靴を穿いた。別れの挨拶を述べやうともせず、やはり何か譯の解らぬ事を呟きながら、彼は入口から出て行つた。ザハールは門まで彼に隨いて行つて、歸つて来た。

「有り難い事でございます、ドミトリイ・イワーノウィチ！厄介拂ひをいたしました。」と彼は若主人に云つた。「さア、これから銀貨を勘定しなくちやなりませんな。」

デレソフは、頭を揺つただけで、返答をしなかつた。彼と音楽家とが一緒に過した初めの二晩の生々とした追憶が彼の心に浮んだ、彼は、アリベルトが過した最後の思はしい日を思ひ出した、そして、中でも、彼は、かの不思議な男を眞初めに見た時に彼の中に起つた驚異と、愛と、同情の、甘くはあるが莫迦々々しい感覺を思ひ出した、そして、彼はアリベルトを哀れに思ひ始めた。

「これから、あの男はどうするだらう。」と彼は自分自身に訊いた。「金もなく、温かい着物もなく、たつた獨りこの眞夜中に！」彼はアリベルトを探しにザハールを遣らうかと思つた、が、その時はもうあまりに遅かつた。

「戸外は寒いかね。」と彼は訊いた。

「氣持の好い霜でございますよ、ドミトリイ・イワーノウィチ。」と従僕は答へた。「申上げるのを忘れておりましたが、春までにはもう少し薪をお買ひにならなければいけないでございますよ。」

「では、どうしてお前は薪が残つて居ると言つたのだ。」

## 七

戸外は、本當に寒かつた、が、アリベルトは寒さを感じなかつた、彼は盗んだ葡萄酒と喧嘩で非常に昂奮してゐた。

街路へ入ると、彼は身の周圍を見廻はした、そして、愉快を感じて兩手を擦つた。街路はガランとして、燈火の長い列が、まだ眩ゆく輝やいてゐた、空は晴れて、美しかつた。「何だ！」と彼は、デレソフ家の部屋々々の明るい窓に對つて、叫んだ、それから、上衣の下の洋袴の衣囊に兩手を突込んで、眞直ぐに前方を見ながら、彼は、重い、ふらつく歩調で街路を眞直ぐに歩いて行つた。

彼は、兩足や腹がひどく重いやうに感じた、何ものかが頭の中でブン／＼云つてゐた、何か眼に見えない力が、彼を投げ倒さうとしてゐるやうに見えた、が、彼はやはりアンナ・イワーノウナが住んでゐる家の方向へと進んで行つた。

不思議な、バラ／＼の考が、彼の頭の中へと突進んだ。或る時は、ザハールとの喧嘩を思ひ出した、或る時は、海を初めて蒸汽船で露西亞へ航行した時のことを思ひ出した。或る時は、彼が今その傍を通つてゐる酒場で或る友人と一緒に過した愉快な晩を思ひ出した。それから、突然、彼の回

想の中でひとり歌つてゐる耳馴れた曲調が心の中に浮んだ、と、彼は、彼の情熱の相手と、劇場での怖ろしい夜とを見てゐるやうな気がした。

しかし、それがバラ／＼であるにも拘らず、さういふ追憶の全體は、彼が眼を閉ざると、どれがより現實に近いが、彼が今何をしてゐるのか、彼が今何を考へてゐるのかを語る事が出来ないほど明瞭と、彼の想像の前へその姿を現はした。彼は、どうして自分の足が動いてゐるのか、どうして頭いたり壁に衝突つたりするのか、どうして身の周囲を見廻はしたのか、どうして街路から街路へと道を歩いたのかを思ひ浮べもしなかつたし、感じもしなかつた。

彼が小モルスカヤ街に沿ふて歩いてゐた時に、アリベルトは、蹲つて倒れた。一瞬間心を集中して、彼は自分の前に、或る大きな、立派な建物を見た、そして、彼はその方へ歩いて行つた。

空には、一つの星も、曉の前兆も、月も見えなかつた、しかし、すべての物が全く明瞭と見えた。町角にほーつと大きく見えるその建物の幾つかの窓は、眩しいほど明るかつた、が、燈火は影のやうに揺れてゐた。建物は、断えずアリベルトに、だん／＼近くなり、だん／＼明瞭して來た。

しかし、燈火は、アリベルトが廣い玄関に入つた時に、消えた。内部は暗かつた。彼は圓天井の下を二三歩進んだ、と、影のやうなものが、這つてゐて、彼が近づくとともに逃げて行つた。

『何故俺はこゝへ來たのかな。』とアリベルトは不審に思つた、が、何かしら打ち勝ち難い力が、大

廣間のすつと奥の方へと彼を引摺つて行つた。

そこには、何か高い壇が立つてゐて、その周圍に、小さな人間のやうに見えるものが、黙つて立つてゐた。『話をしやうとしてゐるのは誰だ。』とアリベルトが訊いた。誰も答へなかつたが、或る一人が壇を指示した。その時、壇の上に、蓬髪の、班色の寛衣を着た、丈の高い、瘦せた男が立つてゐた。アリベルトは、直ちにそれが友人のペトロフであるのが解つた。

『これは不思議だ！彼はこゝで何をしてゐるんだらう。』とアリベルトは獨言を云つた。

『いや、兄弟たち。』とペトロフは、何かを指示しながら、云つた。『君たちは、この男が君たちの間に生きてゐる間は、彼を了解しなかつた。君たちは彼を了解しなかつたのだ！彼は、安つほい藝術家ではない。單なる機械の演奏者ではない。狂人じみた、零落した男でもない。彼は天才だ、世に知られず、又價値を認められないで、君たちの間で死んでしまつた偉大なる音楽の天才だ。』

アリベルトは、友人が誰に就いて語つてゐるかを直ぐ了解した、しかし、彼を妨げるのを好まなかつたので、彼は温順しく頭を垂れた。『彼は、吾々がみんな仕へてゐる聖火によつて、一束の薬のやうに、すつかり焼き盡されてしまつたのだ。』とその聲が続けた。『しかし、彼は、神が彼に與へたすべてのものを、全く成就した。だから、彼は偉人と云はるべきだ。お前たちは、彼を輕侮するかも知れない、彼を苦めるかも知れない、彼を屈辱せしめるかも知れない。』とその聲が、だん／＼力強く續い

た。「しかし、彼は、お前たちすべての者よりも無限に高く、存在したのだ。現在も存在してゐるのだ。そして、未來に於ても存在するのだ。彼は幸福であり、善良である。彼はお前たちすべての者を同じやうに愛した。若くはお前たちのことを心にかけた、それはいづれにせよ同じことなのだ。が、彼が仕へたのは、彼が極めて豊富に賦與されたところのものに對してだけであつた。彼はただ一つのもの——美を、世界に於ける唯一の無限の美を——愛した。お、さうだ、彼は素破らしい人間だ！お前たちはみんな彼の前に身を投げ倒せ。跪け！」とペトロフは、雷のやうな聲で叫んだ。

と、他の聲が、大廣間のもう一つの隅から、温順しく答へた。「俺は、あの男の前に跪きたくない。」とその聲が云つた。

アリベルトは、直ぐにそれがデレソフであるのを知つた。

「何故彼は偉大であるか。そして、何故吾々は彼の前に身を屈めなければならぬのか。彼は、尊重すべき、正しい仕方て身を慮したか。彼は社會へ何か利益を與へたか。吾々は知つてゐるではないか。彼が金を借りて返へさなかつたことや、仲間の藝術家のヴァイオリンを持つて行つて、それを質に入れたことを。」

「神よ！ どうしてあの男は、あんなことを何でもかでも知つてゐるのだらう。」とアリベルトは、尙ほ一層頭を低くして、獨言を云つた。「吾には知れてゐるではないか。」とその聲は續けた、「彼が最も卑し

い人々に詔つたことを、金のために彼等に詔つたことを。吾には知れてゐるではないか、彼がどうして劇場から追ひ出されたかを。どうしてアンナ・イワーノウナが、警察へ彼を渡すと云て脅かしたかを。」

「神よ、あれはみんな眞實でございます。が、私を守らせたまへ。」アリベルトは叫んだ。「私が何故あんなことをしたかを知つてゐる下さるの、あなただけです。」

「耻を知つて、止めろ！」とペトロフの聲が、再び叫んだ。「お前は何の權利があつて咎めるのだ。お前は、彼の情熱を試験したことがあるか。」

「全くだ！ 全くだ！」とアリベルトとが叫びやいた。

「藝術は、人間の中にある力の最も高い表現だ。藝術は、恵まれたる極く僅かの者にのみ與へられるのだ。藝術は選ばれたる者を目が廻るほどの高さに上げるのだ。そして、藝術の純粹を保つことは、困難なのだ。藝術に於ては、あらゆる争闘に於けるが如く、すべての者を自分に服従させ、自分の目的が達せられなければ死ぬるところの勇者がゐる。」

ペトロフは、語るのを止めた。で、アリベルトは頭を擡げて、聲高に、「全くだ！ 全くだ！」と叫ぼうとした。が、彼の聲は、響かずに消えてしまつた。

「それは、お前が出る幕じやないんだ。この事は、お前とは關係がないんだ。」と、藝術家ペトロフは、デレソフに對つて、嚴肅に云つた。「さうだ、彼を卑めろ、彼を輕蔑しろ、」と彼は續けた。「彼は、

お前たち残りのすべてよりも善良で、幸福なのだから。』

この言葉を聞いて心に悦びを感じたアリベルトは、自分を制御することが出来ずに、友だちに近づいて、彼に接吻しやうとした。

『あつちへ行け。俺はお前を知らない。』とペトロフが答へた。『お前の行きたい方へ行け、こゝへ来ちやいけない。』

『さあ、酔漢奴、こゝへ来ちやいけない。』と巡查が、道の交叉點で叫んだ。

アリベルトは逡巡した。そして、ありつたけの力を集めて、頭くまいと背を打つて、次ぎの街路へと道を横切つた。

アンナ・クワノーウナの家までは、二三歩に過ぎなかつた。彼女の家の廣間から、光の流が、雲の積つた庭の上に落ちかゝつて、門には、橋や馬車が立つてゐた。

両手で欄干にかちり附いて、彼は階段を上り、鈴を鳴らした。

女中の眠むけな顔が、開かれた戸口に現はれて、腹立たしげにアリベルトを眺めた。

『駄目ですよ、』と彼女は叫んだ。『あなたを入れてはいけません。言ひ附かつてゐるんですから。』そして、彼女は戸をびつしやり閉めた。音楽の響と婦人の聲とが、彼のところへ漂ふて来た。

アリベルトは、地上に坐つて、壁に頭を倚せかけて、眼を閉じた。その瞬間に、不明瞭ではある

が、互に關係のある澤山の幻が、新たな力で彼を捕へ、彼を壓服して、彼を美しい、自由な實想の界へ連れて行つた。

『さうだ！ 彼はより良く、より幸福なのだ。』と聲が彼の想像の中でひとりでに繰返した。

入口から、ボルカ曲の響が聞えた。その響も、彼がより良くより幸福であるのだと云つた。附近の寺院では、祈禱の鐘の響が聞えた。そして、祈禱の鐘も、彼がより良くより幸福であるのだと云つてゐた。

『さア、俺は今一度あの大廣間へ歸るんだ。』とアリベルトは獨言を云つた。『ペトルフはまだ澤山俺に話したいことがある筈だ。』

大廣間の中には、もう誰もゐるやうには思はれなかつた。そして、藝術家ペトロフの代りに、アリベルト自身が壇の上に立つて、かの聲が前に云つたことをすつかり、彼のヴァイオリンで奏でゐるのだつた。

が、そのヴァイオリンは、不思議に出来てゐた。それは、全體が硝子で出来てゐた、そして、彼は両手でそれを持つて、靜かに胸でそれを擦つて音を出さなければならなかつた。その響は、アリベルトが嘗つてそれに似たものを聞かなかつたほどにも優しく、快美であつた。彼がヴァイオリンを胸へ強く壓へ附ければ壓へ附けるほご、その響は優しく快かつた。響が高くなればなるほど、幾つかの影

だがんく早く消え、大廣間の壁がだんく明るく點された。しかし、ヴァイオリンが壊れるかも知れないので、餘程氣を付けてそれを奏かなければならなかつた。

アリベルトは、硝子の樂器を慎重に、うまく奏いた。彼は、何人も二度とさういふ音樂を聴かないだらうと思はれるやうに何かを奏いた。

彼が疲れたした時に、遠くの重々しい響が彼を惱まし始めた。それは、鐘の響であつたが、この響が語を話してゐるやうに思はれた。

「さうだ。」と、ずつと遠くの、高い所から來る音調で、鐘が云つた。「さうだ。お前たちにはあの男が詰らなく見えるのだ。お前たちは彼を輕蔑する。しかし、彼はお前たちよりもより良く、より幸福なのだ。誰もあの樂器であれ以上に奏けないだらう—」

彼が了解したかういふ言葉が、不意に、アリベルトにとつて聽明で、珍らしく眞實であるやうに思はれた。で、彼は奏くのを止めて、動くまいと努めながら、眼と兩腕とを天に向つて上げた。彼は、自分が美しく幸福であるのを感じた。大廣間には、誰もゐなかつたが、アリベルトは胸を擡げ、誇りに頭に擡げ、すべての者が自分を見得るやうにと壇の上に立つた。

突然、何者か彼の肩の上へ靜かに手を載せた。彼は振り向いた、そして、薄暗の中に一人の婦人を見た。彼女は、憐むやうに彼を見て、頭を振つた。彼は、直ぐに、自分のしてゐたことが悪かつた

のだと氣が附いた。と、羞耻の感覺が、彼を襲うた。

「何處へ僕は行きませうか。」とアリベルトは彼女に尋いた。女はもう一度、永い間、凝つと彼を見て、憐むやうにその頭を曲げた。女は彼女であつた。彼が愛してゐたかの婦人その人であつた、そして、彼女の着物は同じであつた。その丸い白い頸には、眞珠の頸飾があり、愛らしい腕の、肘の上の方は皮膚が露はに出てるた。

彼女は、彼を抱へ、大廣間を通じて彼を連れ出した。大廣間の入口で、アリベルトは月と水を見た。しかし、水は普通の場合のやうに下にはなかつた。月は上にはなかつた。時に見るやうに、或る場所に白い輪があつた。その月と水は一緒になつてゐた——到る處で、上でも下でも、四方八方で、二つのものゝ周圍で、アリベルトと戀人とは、月と水との方へ突き進んだ。そして、その時、彼は、自分が世界中のあらゆるものよりも愛してゐた彼女が、自分の腕の中にあることを思ひ浮べた、彼は女を抱いた、そして、言ひ現はし難い幸福を感じた。

「これは夢ではないかな。」彼は自分自身に尋いた。いや、それは現實であつた、それは現實以上であつた。現實と追憶とが一緒になつてゐるのであつた。

そこで、彼は、最後の瞬間の間に感じた言ひ現はし難い快樂が、消え去つて、再び新たに歸つて來ないのを感じた。

「何故僕は泣いてるんですか。」と彼は女に訊いた。彼女は憐むやうな眼付で、黙つて彼を見た。アリベルトは、彼女が答へて云ひたいと思つたことを了解した。「僕が生きてゐた時と恰度同じやうに。」と彼は續けて云つた。彼女は、返答をせずに、前の方を眞直ぐに見た。

「これは怖ろしい！ どうすれば、俺は自分が生きてゐることを彼女に説明し得らるゝだらう。」と彼は怖れて自分自身に尋いた。「神よ！ 私は生きてゐます！ 御了解を願ひます。」と彼は囁やいた。

「訊はより良くより幸福だ。」と或る聲が云つた。

しかし、何ものかアリベルトを前よりも一層力強く壓へ附けた。それが、月か水であつたか、それとも、女の抱擁か彼の涙であつたか、彼には解らなかつた。しかし、彼は、自分の義務として云はねばならなかつたすべての事を云ふことが出来ないで、萬事が迅速にお終ひになつてしまふのを意識した。

\* \* \*

アンナ・イワーノウナの部屋から出て来た二人の客が、闕の上にならんで居るアリベルトに躓いた。彼等の一人は、アンナ・イワーノウナの傍へ歸つて行つて、彼女を呼びかけた。「あれは可哀相ですね。」とその男は云つた。「あゝして置いたら、あなたは人間を凍死さしてしまひますよ。」

「アツ！ まあ、それはあのアリベルトですよ。あの人何處に臥てゐるんでせう！」と女主人が叫んだ。「アンヌウシユカ、あの人を部屋へ入れて、何處かあの人を入れる場所を見附けておくれ。」と彼女は、女中に對つて言ひ添へた。

「やあ！ 僕は生きてゐるんだ。どうして君たちは僕を埋めるのだ。」と、みんなが正體の無いアリベルトを部屋の中へ入れた時に、彼が呟いた。(完)



ルセルン

(ネフリュウドフ公爵の手記より)

一八五七年、七月八日

昨晚、私はルセルンに到着して、その第一等の旅館シュワイツェルホフ館に泊つた。

「ルセルンは、ヴィアルワルトスターテル湖岸に臨める縣の首都にして。」とシュレーは云つてゐる。「瑞西の最も興味深き場所の一つである。當地を通る三つの重要な官道があつて、世界に於ける最も莊麗なる風光の一つを有するリギイ山は、汽船にて僅かに一時間の距離にある。」

それが事實かどうかは兎も角、他の案内記も同じことを云つてゐる。だから、ルセルンには、あらゆる國の旅人、殊に英國人が群集してゐる。

立派な五階建てのシュワイツェルホフ館は湖の縁にある埠頭の上にあつた、この湖には、隅に禮拜堂を有し、屋根に畫を描いた、折れ曲つた、屋根のある木橋があつた。今では、必要と、趣味と、金を持つてゐる英國人の、怖るべき侵掠のお蔭で、その古い橋は破壊されてしまつた。そして、その代に杖のやうに眞直な、花崗石の埠頭が作られた。埠頭の上には、かの長い、四角形の、五階建の家が

建てられてゐる。家の前には、二列の菩提樹が並んでゐて、支柱が施されてゐた。そして、菩提樹の間には、いつも緑色の腰掛が備へ附けられてあつた。

それは、遊歩場であつた。で、そこには、その瑞西製の麥葉帽を冠つた英國婦人や、簡單で樂な服装をした英國人が、彼方此方歩いてゐて、彼等が作らせることゝなつたその遊歩場を楽しんでゐた。この埠頭と、家と、菩提樹と、英國人は、多分、何處か他の場所に於ては、よく調和したかも知れないが、こゝでは、この不思議に壯大なる、それと同時に筆舌に盡し難き調和を有する、微笑を湛へた自然の中にあつては、それ等のものは、調和してゐないやうに見えた。

私が自分の部屋に昇つて行つて、湖に面した窓を開けるや否や、漂渺たる水と、それ等の山岳と、この空の美が、最初の瞬間に、文字通りに私を眩惑させ、私を壓服した。私は、内心の不安を覚え、不意に私の靈魂を溢るゝまでに充つたこの感情を、何かの仕方では必要を覺えた。私は、誰かを抱擁——強く抱擁したい慾望を感じた。誰かを操るか、掴るかしたい慾望を感じた。一言で云へば、誰かと自分とに、何か奇抜な事をして見たいといふ慾望を感じたのであつた。

夕方七時であつた。雨が、終日降つてゐたが、この時は、霽れてゐた。

熱した硫黄のやうに青い湖は、綠色に彩色した湖岸の間の凹の鏡のやうに、滑かに、ぢつと動かずに、私の窓の前に擴がつてゐた。その表面には、消え行く水尾を引いてゐる小船が點々と浮んで

た。ずつと遠くでは、湖は、二つの大きな岬の間に狭められてゐた。そして、薄暗くなつて、だんく狭くなつて、山や、雲や、氷河の重疊した後に消えてゐた。前の方には、葦や、牧場や、庭園や、別荘のある、濡つた、爽やかな、緑色の湖岸の全景が擴がつてゐる。それからずつと向ふには、封建時代の城砦の廢墟を冠つてゐる、暗緑色の森の茂つた高所がある。後方には、巖と灰白色の雪の堤とで築き上げられた、夢のやうな峰をもつてゐる山脈の、河のやうにうねつた薄鼠色の並樹があつた。そして何も彼もが、空色の清爽かな、透徹る大氣で洗はれ、裂けた空を通して射出してゐる日没の太陽の温かな光線によつて、燃えてゐた。

湖の上や、山脈の上や、空には、一本の完全な線も、一つの完全な色彩も、一つの單調な瞬間もなかつた。到る處に、動きと、不均齊と、幻と、絶えざる結合と、影と線の變化があつた。そして、中でも、靜穩と、柔和と、統一と、美に對する努力が、目に立つた。

そして、私の窓の前の、この名狀し難い、複雑な、型にはまらぬ美の中に、支柱のある菩提樹と、並樹と、緑色の腰掛とのある、埠頭の白い線——それ等のものは、遠方の別荘や廢墟の如く、美しい景色の調和全體に適從せずして、その反對に、下品にそれと矛盾する、人間の器用さのみすほらしい、無趣味な製作物である——が、馬鹿々々しい百色眼鏡式の亂雜でもつて、擴つてゐるのだ……断えず、私の意志に反して、私の眼は、この埠頭の怖るべき直線に引かれてゐた。そして、心の中では、私は、

それを蹴飛ばしたいと思はずにはゐられなかつた。人の眼の下にある、鼻を不恰好にする黒い點のやうに、それを除きたいと思はずにはゐられなかつた。

しかし、埠頭は、散歩してゐる英國人とともに、いつ迄もその場所にあるのであつた。で、私は、無意識に、埠頭が私に見えなくなるやうな觀察點を見附けようと試みた。そしてさういふ景色を見附けることに成功した。で、食事の用意が出来上るまで、私はたつた一人で、この不完全な、然しそれだけに愉快な、ただ獨りで自然の美に對して默想する時に誰でも經驗するやうな、憂鬱な感情を楽しんでゐたのであつた。

七時半頃に、私は食事に呼ばれた。静くとも百人の支度の出来た二つの長い食卓が、一階の立派に裝飾された食堂の中に、據がつてゐた……客が黙つて集まるのが、三分間續いた——婦人の衣擦れの音が聞え、柔かな足音が響き、靜かな言葉が、鄭重で優雅な給仕人に囁かれた。そして、紳士や淑女は場所全體を占めた。彼等は都雅な衣装をしてゐた。立派な衣装をさへしてゐた。そしてその大部分のものは完全な趣味に適つた衣装をしてゐた。

瑞西では、大抵いつでもさうであるが、客の大多数は瑞西人であつた。で、この事が、共同の食卓の重なる特徴となつてゐた——即ち、義務として認められた嚴格な禮節と、高慢によつて生ずるのではないが、社交的關係に對する必要の缺乏によつて生ずる遠慮と、それから最後に、各人が、その要求

の快よい、楽しい感謝に於て感ずる満足の均一的な感覚とを特徴としてゐた。

あたりには、最も白いレースや、最も白い襟や、最も白い歯——自然の歯も義歯も——や、最も白い顔色と手が、輝やいてゐた。しかし、その顔の多くは非常に美しいが、自分自身の幸福の意識だけを表はしてゐた。彼等の周囲の一切のものに對しては、それが彼等自身の自我に直接の利害を有せざる限りは、絶體に興味を缺いてゐることを示してゐた。そして、指輪の輝やいてゐる、若くは、無指手袋で保護されてゐるその白い手は、襟を眞直ぐにしたり、肉を切つたり、葡萄酒のコップを充たすためにのみ動かされてゐた。さういふ行動には、如何なる靈魂の感動する感情も表はれてはゐなかつた。

時折、或る一家族の人々が、低聲で、かく／＼の皿若くは葡萄酒が優れてゐることや、リギイ山からの眺望の美しいことに就て、言葉を交はしてゐた。

一人族の旅客は、男も女も、黙つて互ひに並んで坐つてゐた。そして、互ひに見合はしさをしなかつた。時々、この百人餘りの人間の中の二人が、互ひに話すことがありとすれば、その會話の題目は、天氣のことか、リギイの山登りのことに決つてゐた。

多くの肉刀や肉叉が、殆んど皿の上で鳴ることはなかつた。それほど完全に禮儀が守られてゐたのである。そして、誰一人として、肉叉より他の方法で豌豆や野菜を敢て口へ運ばうとする者はなかつた。

給仕人は、全體の沈黙に識らず識らず服従して、どの酒がお好みで御座いますかなどと囁聲で尋ねてゐた。

こんな食事は、徹頭徹尾私を沈鬱にさした。私はこんな食事を好まなかつた。それが濟む前に、私は青くなつてしまつた……それはいつでも、どうかして私が悪いのであつたかのやうに、私には思はれた。それは、恰度、私の子供の時、何か悪戯をしたので、椅子の上に載せられて、『さア、暫らくお休み、可愛い兒。』と皮肉に云はれた時と同じやうであつた。そんな時には、私の幼い血は、血管を通して脈を打つてゐた。そして、他の部屋で、私は私の兄弟の樂しげな叫聲を聞いたのであつた。

私は、よく、かういふ食事に於て私が經驗した、この窒息させられるやうな感情に反抗しようと思つた。しかし、それは無駄であつた。すべてのこの生きながら死んでゐる顔は、私に對して抵抗し難い優越をもつてゐるので、私自身も亦死人のやうになつた。私は、何の望みも持たないのであつた。如何なる思想も持たないのであつた。觀察さへもしないのであつた。

最初、私は隣りの人と會話をしようと思つた。けれども、私は、絶對に顔を變へずに、そこでは百度も、千度も繰返へされた言句を繰返へした以外には、如何なる答へをも得なかつた。

けれども、この人々はみんな、決して馬鹿でも無情でもなかつた。彼等の多くは、死んだやうに見えてはゐるが、明かに、實際に於ては、私自身の生活よりも遙かに複雑で興味のある自己中心の生活

に馴れてゐたのであつた。では、何故に、彼等は、人生の最大の悦樂の一つ——人と人との交際から来る悦樂——を失つたのであらうか？

巴里の私たちの寄宿舎では、どんなにそれと違つてゐたことであらう。そこでは、多くの異つた民族と、職業と、個性に屬してゐた私たち二十人の者が、共同の食卓に相會し、ゴール人の社交心の影響の下に、最も鋭い妙味を見出したものであつた。

そこでは、私たちが坐つた瞬間から、食卓の一つの端から他の端まで、全體が、諧謔と洒落を間に挟んだ——それは往々變則な言葉で話されたのだが——會話を始めるのであつた。そこでは、誰も彼も、禮儀の心配なしに、頭に浮ぶことを何でも喋つた。そこでは、私たちは、自分の哲學者や、自分の論争者や、自分の「ゴッソゴッソ」(高麗な人物)や、自分の目的を持つてゐた——それはみんな吾々に共通の特質であつた。

そこでは、中食が濟むと直ちに、私たちは、食卓を一方の側へ移して、拍子などにはあまり注意せず、埃の附いた敷物の上でボルカを踊つた。そして、それは度々夕方まで續けられた。そこでは、私たちは、さちらかと云へば巫山戯てゐたので、賢明過ぎるほどではなかつたが、全く尊敬を受けてゐた。私たちは、やはり人間であつた。

で、小説的な性癖をもつてゐる西班牙の伯爵夫人や、中食の後で神曲の一部の朗讀を主張する

伊太利の僧侶や、チュイレリー宮殿の拜觀權をもつてゐるアメリカの醫師や、髪を長くしてゐる若い劇作家や、現在ある最もいゝボルカを作曲したと自稱する婦人ピアノリストや、それから、美人で、どの指にも三つの指輪をはめてゐる不幸な寡婦や——私たち全體が、表面的ではあるが、人間らしい愉快なこの實際を楽しんだのであつた。で、私たち各自が、この交際から、お互ひの心ゆくばりの追想を——多分それも或る場合にはもつと軽いものであり、或る場合にはもつと重大なものであつたであらう——運び去つたのである。

けれども、すべてのさういふレースや、飾紐や、寶石や、香油を塗つた髪や、絹の着物を見受けるこの英國人の會食晚餐では、私は度々考へた。この裝飾を施してゐても、果して幾人の婦人が自ら幸福を感じ、他人をも幸福にしてゐるであらうか、と。

多くの友だちや戀人たちが——最も幸運な友だちや戀人たちが——恐らくはさういふことを知らないで、こゝに並んで坐つてゐることを考へると、不思議な氣がするのだ。何故彼等はこの考へに到達しなかつたか、何故彼等は、非常に容易く與へ得るところのこの幸福、彼等が非常に待望んでゐるこの幸福を與へ合はないのか、それは誰にも分らない。

かういふ食事の後では、いつもさうであるやうに、私は青くなり始めた。で、後附を待たずに、私は、同じ心の状態で、食後運動のために市中へ出掛けた。私の沈鬱した心の状態は、救はれなかつた。

いや、寧ろ、燈火の無い、狭い泥深い街や、戸を閉めた商店や、酔拂つた職工と、水浴後道を急いでゐる、若くは婦人帽を冠つて、町角を廻る時四邊を見廻はしてゐる婦人たちとに出會つたことなどで、益々救ひ難きものとなつた。

身の周圍に一瞥をも與へずして、若くは自分の頭の中に或る考をもつて、私が旅館に返つて行つた時は、街衝はもうすつかり暗くなつてゐた。私は、睡眠が私の憂鬱を終息せしめてくれよばいと思つた。私は、或る新たな場所へ到着したばかりの人々を、何の理由もなしに惱ます、かの特種の精神の冷たさと、寂寥と、沈鬱とを経験した。

しつかりと下を見定めながら、シウワイツェルホフ館へと埠頭に沿ふて歩いてゐた。その時不意に、私の耳は、或る特種な、しかし全く愉快な、快い音楽の旋律に打たれた。

この旋律は、直ぐに私を快活にする効果をもつてゐた。それは恰度、明るい、快活な光が、私の靈魂へ注ぎ込まれたかのやうであつた。私は、満足と愉快を感じた。私の眠つてゐた注意は、再び周圍のすべての物に對して呼醒まされた。で、その時まで、私が冷淡であつた、夜と湖の美が、不意に、新奇な物のやうに、素早い力でもつて私を捕へた。

私は、灰色の雲でその深緑を汚しつゝあつた——今月が出て明るくなつた——暗い空や、その表面に明るい窓を映してゐる硝子板のやうな暗綠色の湖や、遠方の雪で蔽はれた山脈を、無意識に、

一目で見た。そして、私は、フレッシェンブルグ湖岸の蛙の鳴聲と、鶉の濡ひのある爽やかな鳴聲を聞いた。

私の前方真直ぐの、音楽の響が最初起つた地點——それは尙特に私の注意を惹いてゐたのである——の、街の薄暗の中に、私は、半圓形をしてゐる人の群を見た。そして、群集の前に、少し離れて、黒い着物を着てゐる小さな男を見た。

群集とその男との後には、灰青色の、暗い、濃淡のある空によく調和して、何處かの庭の二三本のロムバルデイ白楊と、高く嚴かに立つてゐる、古い寺院の塔の上の尖頂とが、立つてゐた。

私がそこへ近づくと、旋律が更に明瞭になつた。或る距離まで行くと、私は、夕の空氣へ快く擴がつて行く六絃琴の豊富な諧音と、二三の聲とをはつきり聞き分けることが出来た。その聲は、互に順番に發せられてゐるので、或る一定の主旋を歌つてはゐなかつたが、旋律が最も高く發せらるゝ場所では、主旋の暗示を與へた。

主旋は、快い典雅なマヅルカの性質に似てゐた。聲は、或は近く、或は遠く、或は低音が、或は次中音が、或はチロルの囀鳥が鳴かんとする時のやうな假聲が聞えた。

それは小唄ではなくて、或る小唄の上品に巧妙な代り歌であつた。私には、それが何だか解らなかつた、けれども、それは美しかつた。

この六絃琴の挑発的な、和やかな諧音、この快よい、優しい旋律、湖水の夢のやうな周囲の中にある、この黒い男の孤獨な姿、輝く月光、莊嚴な沈黙の中に立つてゐる寺院の二つの尖閣、白楊の黒い梢――すべてのもものが、不思議で、全く美しくかつた。いや、妙くとも私にはさう見えた。

人生に對するすべての混亂した、我儘な、印象は、意義と美とに充ちて來た。それは恰度、私の靈魂の中に、爽かな、香氣のある花が急に生じたかのやうに、私には思はれた。一瞬間前まで私が感じてゐた、世界中の一切のものに對する退屈と、沈鬱と、冷淡との代りに、私は、愛の要求と、希望の充足と、生活の無限の享樂を経験したのであつた。

「お前は何を望んでゐるのか、お前は何に憧れてゐるのか。」と内心の聲が云つてゐるやうに思はれた。「こゝに、それがあるのだ。お前は、四方八方から、美と詩に圍まれてゐるのだ。それを吸ふがよい、一ぱいの、深い、呼吸で、お前の力が能ふ限り、お前の能力で出来る限りそれを享樂するがよい。それは、みんなお前のだ。みんな祝福されてゐるのだ！」

私は、更に近づいた。小さな男は、旅を歩いてゐるチロル人のやうに見えた。彼は、一本の足を少し前へ出し、頭を後に垂れて、旅館の窓の前に立つてゐた。そして、彼が六絃琴を弾く時に、彼は、さうした別々の聲で、彼の優美な歌を唱つてゐるのであつた。

私は、直ぐに、この男に對する好情と、彼が私に齎してくれた變化に對する感謝の情を感じた。

この歌手は、私が判断の出来る限りでは、古い黒の上衣を着てゐた。彼の髪は、短かく、黒かつた。そして、彼は、もう新しくない文官帽を冠つてゐた。彼の衣装には、藝術的なところは何もなかつたが、その伶俐な、若々しい、快活な動作と姿勢は、彼の小さな身體と相俟つて、人に愉快を與へると同時に哀みをも催はさしめる光景を作つてゐた。

眩ゆく燈火の點つた旅館の、入口階段や、窓の中や、露臺の上には、美しい裝飾を凝らし、衣装を着けた婦人や、びか／＼とした襟を着けた紳士や、黄金の刺繍をした仕着を着てゐる門番と従僕が立つてゐた。街には、群集が半圓形を描いてゐるし、少し離れた、側道の菩提樹の列樹の中には、瀟洒たる服装の給仕人や、白の帽に白の前掛をかけた料理人や、互ひに腰のまはりへ手を廻はして道歩いてゐる少女が、集まつてゐた。

すべての人が、私が自ら味はつたのと同じ感情の影響を受けてゐるやうに見えた。すべての人が、黙つて、歌手の周圍に立つて、耳を澄ましてゐた。歌の合間々々を除くほかは、沈黙があたりを支配してゐた。歌の合間には、遠方から、規則正しい槌の音が、水上を通つて聞えて來た。それから、フレッションブルグ湖の岸では、蛙の鳴聲が魅するやうな單調子を響かせ、鶉の牙えた單調な鳴聲が、その蛙の鳴聲を遮つた。

街の真中の、暗黒の中にあるこの小さな男は、對句に次ぐに對句を以てし、小唄に次ぐに小唄を唱

つて、驚のやうにその心情を吐露した。私は彼に近づいたけれども、彼の歌は、ます／＼大きな満足  
を私に與へた。

彼の聲は、大きな力をもつてはるなかつたが、非常に快よく、優しかつた。彼が聲を調整して現は  
す、旋律に對する趣味と感情とは、異常なものであつた。そして、彼が大なる天分をもつてゐるこ  
を證明してゐた。

一つ／＼に對句を歌つてしまふと、彼はいつでも、主旋律を變つた調子で繰返へした。そして、すべ  
ての彼の變調は、彼にとつては立所に、自然に出て來るのだといふことが明かであつた。

群集の中でも、上方のシユワイツェルホフ館でも、傍らの並木道でも、度々賞讃の私語が聞えた、尤  
も、一般は、非常に尊敬の深い沈黙に支配されてゐたのではあるが。

露臺や窓は、家の中の燈火で美しく照らされた。肘で寄りかゝつてゐる、美しい装ひを凝らした男  
女によつて、だん／＼一ぱいになり續けてゐた。

散歩してゐた人々は、足を停めた。で、埠頭の暗黒の中には、男や女が幾つもの小さな集團になつ  
て立つてゐた。

主な群集から少し離れた、私の傍に、上品な料理人と従僕が、煙草を燃らしながら立つてゐた。料  
理人は、音楽にひどく感動して、高い假聲の調子になると一々、狂熱的に従僕に對つて黙頭いて見

せ、『どうだ。あの歌は！えゝ？』と云ふやうな、驚嘆の表情を浮べて、肘で従僕を軽く突いた。

無意識の微笑でもつて、彼が経験した感情の深いのを表はしてゐた従僕は、狂熱的になるのは彼に  
は全く六ヶ敷しいことだし、彼は以前にもつと良い音楽を聞いたことがあるのだといふことを示めさ  
うとでもいふやうに、彼の眉をすほめて、料理人の小突きに答へてゐた。

彼の歌の合間の一つに、かの巡禮樂人は咳拂ひをしてゐたが、その間に、私は、彼が何ういふ人間  
で、屢々こゝへ來るのかどうか、従僕に訊いた。

『この夏は、二度こゝへ來ました。』と従僕が答へた。『あの男は、ブルゴーヴィから來るので、物を乞ひ  
をしながら歩き廻はつてゐるのです。』

『では、あの男のやうなのが澤山、こゝへやつて來るのかね。』と私は尋ねた。

『えゝ、さうです。』と従僕は、私が尋ねた意味が充分に解らないで、答へた。が、直ぐその後で、  
我に返つて、彼は言ひ添へた。『いゝえ、さうぢやないんです。私がこゝで聞いたのは、この男一人限  
りです。他には誰も來ませんでした。』

この瞬間に、小さな男は、彼の最初の小唄を唱ひ終つて、手早く六絃琴をブーンと鳴らして、獨逸  
語の方言で何か云つた。私にはその言葉が解らなかつたが、それは、周圍の群集に哄笑を起させた。

『あの男は、何と云つたんだね。』と私が訊いた。



「喉が乾いたから、お酒が飲みたいと云つたんですよ。」と、私の傍に立つてゐたかの従僕が答へた。

「何だつて？あの男は酒が好きなのかね。」

「ええ。あゝいふ連中はみんな、さうですよ。」と従僕は、微笑んで、かの巡禮樂人を指さしながら、答へた。

巡禮樂人は、帽子を脱いで、六絃琴をぶら附かせながら、旅館の方へ行つた。彼は頭を掻けて、半ばは伊太利語、半ばは獨逸の抑揚で、手品師が見物人に話しかける時に用ふるのと同じ音調で、窓の傍や露臺の上に立つてゐる淑女紳士に話しかけた——

「Messieurs et mesdames, si vous cr, yez que je sagne quelque chose, vous vous trompez: je ne suis qu'un pauvre tripler.」(皆さん、若しあなたが、私が何か儲けると思つてゐるならば、それは皆さんのお考へ違ひです、私はたゞひとりの貧乏なチアブルです——の意。)

彼は、一瞬間、黙つて立つてゐた。けれども、誰に彼に何も與へないので、彼は、もう一度その六絃琴を取上げて、云つた——

「A present, messieurs et mesdames, je vous chanterai l'air du Righi.」(さう、皆さん、私は皆さんにギイ山の唄をうたひませう——の意。)

彼の旅館の聴衆は、一語も答へずに、次ぎの歌を待ちながら立つてゐた。下の方の街では、笑ひが張り渡つた。それは多分、半ばは、彼の言葉使ひが奇怪かつたためで、半ばは、誰も彼に一物をも與へなかつたためであつた。

私は、彼に二三サンチムを與へたが、彼はそれを巧みに一つの手から他の手へ移して、その胸衣の衣囊に収めた。で、それから、その帽子を再び冠つて、もう一度、彼がリギイ山の唄と呼んだ、優美な、快よい、チロルの旋律を唱ひ始めた。

彼の番組の最後になつてゐたこの唄は、前のものよりも優れてゐた。で、驚嘆してゐる群集の四方八方から、賞讃の聲が聞えた。

彼は唄を終つた。彼は、その六絃琴をぶら附かせて、帽子を脱いで、それを前方へ差し出して、二三歩窓の方へ近づいた。そして又、彼の定文句を繰返へした——

「Messieurs et mesdames, si vous croyez que j'agne quelque chose.」(皆さん若し皆さんが、私が何か儲けると思つてゐるならば——の意。)

彼は、明かに、この文句が極めて如才がなく、氣の利いてゐると考へてゐるらしかつた。が、私は、彼の聲と動作に或る不決断と子供らしい臆病——それは、かういふ身體の小さな男に於ては、殊に哀れを感じさせた——とを認めた。

やはり美しく、明るい窓や露臺に群がつてゐた上品な人々は、その立派な服装でもつて輝やいてゐる

た。二三人の者は、眞面目な、用心深い調子で言葉を交はしてゐた。それは一見、手を擴げて彼等の下方に立つてゐるその歌手に就いて語つてゐるやうであつた。他の者は、注意深い好奇心でもつて、この小さな黒い姿を瞰下ろしてゐた。一つの露臺では、或る少女の快活な、鈴を鳴らすやうな笑聲が聞えた。

取巻いてゐる群集の中では、話聲や笑聲が断え間なく高くなつて行つた。

歌手は、三度目にその定文句を繰返へした。が、今度は前よりも弱い聲で、文句をお終ひまで云つてしまひさへしなかつた。そして、彼は又帽子を持つてゐる手を差出した。が、直ぐにそれを引込めてしまつた。もう一度、彼の歌を聴かうとして立つてゐた、かの立派な衣装の、幾十人かの人々は、一ベニーも彼に投げては與らなかつた。

群集は、無慈悲に笑つた。

小男の歌手は、前よりも逡巡つてゐるやうに私に見えた。彼は六絃琴を他の手に持ち代へて、帽子を上げて、云つた――

“Messieurs et mesdames, je vous remercie, et je vous salue une bonne nuit.” (皆さん、もうお歸り下さい。さようなら――の意。)そして、彼は帽子を冠つた。

群集は、から／＼笑つて、満足してゐた。美しい淑女紳士は、靜かに言葉を交はしながら、漸次露

臺から引込んでしまつた。並木道では、再び散歩が始まつた。歌を唱つてゐる間靜かであつて街路は、いつもの活氣に返へつた。けれども、二三人の人が、少し間を離れて立つてゐた。そして、歌手に近づかずに、彼を見て、笑つてゐた。

小男が、振り向く時に、齒の間で何事かを咬くの私を聞いた。そして、彼が、明かにだん／＼小さくなりながら、早い足調で、市の方へ急いで行くのを見た。彼を見てゐた散歩の人々は、やはり彼の無駄骨折を面白がりながら、或る距離まで彼に隨いて行つた。私の心は、渦巻いてゐた。すべてがどういふ譯であるのかが私には解らなかつた。で、私はやはり同じ場所に立つて、かの小男が速かに消えて無くなつた後の暗黒を引込られるやうに見詰めた。彼は、面白がる散歩の人たちに後を追はれて、大跨で、だん／＼早くなる歩調で、市の方へ立去つたのであつた。

私は、苦痛と悲哀の感情に、殊に、かの小男や、群集や、私自身に對する侮辱の感情に、支配されてゐた。それは恰も、金を乞ふて、何にも貰はなかつたのが私であるかのやうであつた。嘲笑を返へされたのが私であつたかのやうであつた。

もう見るのを止めて、心が壓迫されるのを感じながら、私も亦大跨で、シユワイツェルホフ館の玄関へと急いだ。私は、自分を支配した感情を説明することが出来なかつた。たゞ私の靈魂を抑へつけ、私を壓迫する石のやうな何ものかであつて、私はそれから自分を自由にすることが出来ないのであつ

た。

大きな、燈火の豊富な玄關で、私は、鄭重に私のために道を開けた門番に出會つた。英國人の一家族が、やはり入口にゐた。威儀ある、好男子の、丈の高い紳士が、黒い帽子を冠り、片方の腕に縞羅紗の布を持ち、手に高價な杖を持つて、靜かに、様體振つて出て來た。彼の腕には、絹の着物を着て、眼醒めるやうな飾紐や最高價のレースを着けた婦人帽を冠つた夫人が縋つてゐた。この二人と一緒に、銃兵型の羽根を着けた優美な瑞西製の帽子を冠つた、美しい、生々しい、若い令嬢がゐた。彼女の帽子の下からは、彼女の美しい顔に和かに纏ひつく、長い、ブロントの鬚毛がはみ出てるた。彼等の前には、薄い刺繡した着物の下から、丸い、白い膝を出した、十歳ばかりの活潑な女の子が、跳ねてゐた。「結構な晩ねえ！」と夫人は、私が彼等の傍を通つた時に、美しい、幸福さうな聲で云つた。

「あゝ。」と英國人が、無性に呻つた。そして、彼は、口を利くのさへも煩いほど、この世界に住むことを楽しみに思つてゐるのが明かであつた。

そして、彼等はみんな一樣に、この世界に住んでゐることが、非常に愉快で、安樂で、非常に明るく自由であると思つてゐるやうに見えた。彼等の顔や動作は、他の人の生活に對する全くの無頓着と、絶對の自持とを現はしてゐた。それは、門番が道を開けて、そんなに鄭重に辭儀をしたり、彼等が歸ると、清潔な、快よい寢床や部屋を彼等が見出すのが、彼等にとつてはみんな當然のことで、破り難

い權利であるといふやうであつた。それから、私が無意識に、疲れて、恐くは空腹を感じながら、多くの恥辱を受けて、笑つてゐる群衆の前を歸つて行くかの巡禮樂人と彼等を比較したほどであつた。で、その時、不意に、私は、そんな沈鬱の重荷をもつて私を壓迫してゐたものが何であるかを了解した。そして、かういふ人たちに對して、名狀し難い憤怒を感じた。

私は、二度、この英國人の傍を彼方此方歩いた、そして、二度とも、彼の方を振り向かずに、私の肘で彼を小衝いたが、それが名狀し難い満足の感情を私に與へた、それから、私は階段を一氣に降りて、あの小男が行つた市の方向へ暗黒の中を急いだ。

前に一緒に歩いてゐた三人の男に追附いて、私は歌手が何處へ行つたかを訊いた、彼等は笑つて、前方を眞直ぐに指さした。そこに彼はゐた、彼は早い歩調でたつた一人歩いてゐた、誰も彼と一緒にゐるなかつた。彼は、断えず悲しい獨白に耽つてゐたやうに私には見えた。

私は彼を捕へて、私と何處かへ行つて、酒を飲まうと申込んだ、彼は、その早い歩行を續けてゐた。私の方を見ようともしなかつたが、私が云つてゐることを覺つた時に、彼は立停つた。

「ぢや、そんなに御親切におつしやつて下さるんなら、御遠慮なく参りませう。」と彼は云つた。「こゝに小さなカフェがありますから、お伴ませう。この家は流行らない家ですがね。」と彼は、まだ開いてゐた酒場を指さしながら、云ひ添へた。

「流行らない」といふ彼の言葉は、流行らないカフェへ行くのは止して、この男の音楽を聴いた人々のあるシユワイツェルホフ館に行かうといふ考を、無意識に暗示した。

シユワイツェルホフ館は、彼にはあまりに立派過ぎると云つて、彼はそこへ行くといふ思ひ附きに對して、五六度一種の臆病な不安を見せたにも拘らず、私はやはり自分の目的を遂行せんと主張した、で、彼は、それに賛成して、快活に六絃琴をぶら附かせながら、私と一緒に、埠頭を通つて後戻りした。

私が、この巡禮樂人と話をしてゐる時に、傍を通りかゝつて、立停つて、私の云ふことを聴いてゐた二三の逍遙きの人々は、この時、彼等の間で何事かを言ひ争つた後で、明かにこのチロル人から更に演奏を期待しながら、旅館の入口まで私たちに隨つて來た。

私は、廣間で會つた給仕人に、一罎の葡萄酒を注文した。給仕人は微笑んで、私たちに眺めて、返答をせずに行つてしまつた。同じ注文を私が自ら命じた給仕人頭は、私の言葉を嚴かに聴いてゐた。そして、巡禮樂人の温順しい、小さな身體を頭から足までじろく見て、私たちに左の方の部屋に連れて行くやうに嚴格に給仕人に命令した。

左方の部屋は、身分のない者の入る酒場であつた。この部屋の隅には、尙儂の女中が皿を洗つてゐた。道具と云つては、裸の木製の食卓と長腰掛の他には何もなかつた。

私たちの給仕に來た給仕人は、横柄な微笑を浮べて私たちを眺め、衣囊に手を突込み、尙儂の皿洗女と何か言葉を交換してゐた。彼は、明かに、彼が權威に於ても社會上の地位に於ても、巡禮樂人よりは遙かに高く自分を感じてゐること、従つて、私たちの給仕をするために彼が呼ばれたのは、侮辱であるのみならず、實際の戯談でさへあるのだと彼が考へてゐることを私たちに了解せしめやうと試みた。

『vin ordinaire (普通の葡萄酒)は如何ですな』と彼は、私の連れの方に目示せして、彼のナブキンを一方の手から他の手に持ち換へながら、如才の無い眼附で尋ねた。

「三鞭酒、それから、何でも一ばん良いものを。」と私は、高慢な、最も様體振つた態度をしようとなつて、努めながら、云つた。

しかし、三鞭酒も、高慢な様體振つた態度を見せようとする私の努力も、この下僕には効果を與へなかつた、彼は疑ひ深く微笑んで、私たちを見ながら一二分間躊躇ついで、ゆつくりその金時計を見た。そして、ゆつくりした歩調で、散歩にでも出掛けるやうに、部屋を立去つた。

間もなく、彼は二人の他の給仕人を連れて、酒を持って歸つて來た。この二人の給仕人は、皿洗女の傍に坐つて、恰も兩親が、温順しく遊んでゐる子供たちを凝視する時のやうに、面白さうな注意と、柔和な微笑をもつて、私たちを眺めた。皿洗女だけは、私たちを嘲笑的に見なかつたやうに、そして

同情的であつたやうに私には見えた。

巡禮樂人と一緒に食事をして、かういふ給仕人全體の眼の光りの下で、響應者の役を勤めるのは、困難で見苦しいことであつたが、私は、出来るだけ窮屈でないやうにして、自分の義務を果さうと試みた。燈火の點いた部屋では、私は彼を一層よく見ることが出来た。彼は、小さな、しかしよく均合のとれた、筋肉の發達した男であつた。尤もその體格は、殆んど倭人と云つてもいい位であつたが彼は、剛毛のある黒い髪と、濡ふた大きな黒い眼と、濃い眉と、全く快よい、魅惑的な形をした唇とをもつてゐた。彼は小さな口髭をもつてゐた。彼の髪は短かく、その着物は極めて質素で、卑しかつた。彼は極く清潔だといふ方ではなかつた、みすほらしく、日に焼けてゐた、全體から見ても労働者のやうな様子をしてゐた。彼は、藝術家といふよりは、寧ろすつと貧しい商人に似てゐた。

彼のいつも濕潤な、輝やいた眼と、彼の堅く結んだ口にだけ、獨創若くは天才の面影があつた。彼の顔で想像すると、彼の年齢は、二十五歳から四十歳までの間であつた。實際は、彼は三十七であつた。

彼が、人の好い快心と、明かな眞率とを以て、彼の生涯に就て私に語つたところは、かうである。彼は、アルゴウの生れであつた。幼少の頃、彼は両親を失つた、彼には他に親戚がなかつた。彼はどんな財産をも持つてゐなかつた。彼は、或る大工の所へ奉公したが、今から二十二年前に、彼の

片手が骨疽に罹つて、再び働くことが出来なくなつた。

子供の頃から、彼は歌を唱ふことが好きだつたので、始めて歌手になつた。時に見知らぬ人が、彼に金を與へた。この金で、彼は彼の職業を覚え、六絃琴を買つた。そして、今まで十八年の間、彼は、旅館の前で唱ひながら、瑞西や伊太利を通じて漂泊して歩いた。彼の着物と云つては、彼の六絃琴と、その時半フランしか入つてゐない小さな褌口だけであつた。今晚晩飯を喰べて泊るのには、それだけで充分であつた。

今日まで十八年の間に、彼は、瑞西の最良の、一ばん人氣のある遊覽地——ツリーッヒや、ルセルンや、インテルラークンや、シャムーニなどを歩き廻つた。彼は、サン・ベルナルド越を通つて伊太利に降りて来て、サン・ゴタールド山を越え、若くはサヴォイを通つて歸るのであつた。近頃は、彼は、風邪を引いて、足が不自由で困つてゐたので——彼はそれを僂麻質斯と呼んでゐた——歩くのがなかく困難であつた。その病氣は、年々ひどくなり、彼の聲と眼は、だん／＼弱くなるのであつた。しかし、彼は今インテルラークンや、アイレ・バインスへ行く途中であつた。そして、そこから、小サン・ベルナルド山を越えて伊太利に行かうとしてゐるので、この小サン・ベルナルド越を彼は非常に好んでゐた。大體に於て、彼が自分の生活に充分満足してゐることは明かであつた。

彼は何故家に歸るのか、彼はそこに親戚か家や土地を持つてゐるかどうかを私が訊いた時に、彼の

口は、快活な微笑で開いた。そして、彼はかう答へた。"Oui, le sucre est bon, il est doux pour les enfants" (え、砂糖はよいものです。子供にとつてよいものですよ——の意)そして、彼は下僕たちの方に向つて目を瞬いた。

私は、彼の云ふ意味を掴むことが出来なかつたが、下僕の一團は吹き出して笑つた。

「いゝえ、私にはそんなものは何一つありませんが、それでも、私はいつも歸つて行きたいんです。ア。」と彼は私に説明した。「いつでも、人をその生れ故郷へ引附ける何かがあるのです、私は歸つて行くんですよ。」そして、今一度、彼は、利口な、自己満足の微笑を湛へて彼の文句を繰返へした。"Oui, le sucre est bon." (え、砂糖はよいものです——の意)それから、お人好しらしく笑つた。

下僕たちは、非常に面白がつて、腹を抱えて笑つた、たゞ尙僕の皿洗女だけは、彼女の大きな親切な眼で、この小男を見て、私たちが話して居る間に彼が腰掛けから突き落した帽子を、彼のために拾つてやつた。私は、漂泊する巡禮樂人や、輕業師や、手品師でさへもが、彼等が藝術家と呼ばれるのを喜ぶのを知つてゐた。で、私は五六度、彼が藝術家であるといふことを私の連れに暗示した。けれども、彼は全然この稱號を受けないで、全く單純に、彼の仕事を生活の手段と見做してゐた。

彼の唱ふ歌を自分で作つたことはないかと、私が彼に訊くと、彼はこの奇妙な疑問に非常に驚いて、彼が唱ふ歌はいづれも、古いチロルの原歌であると答へた。

「しかし、あのリギイ山の唄はどうだね。そんなに古いものぢやないと僕は思ふが。」と私は云つた。「お、それは約十五年前に作られたものですよ、バーゼルに一人の獨逸人がゐましてね、利口な男でしたが、その男があれを作つたのですよ。立派な歌ですよ。あの男は、特に旅人のためになれを作つたのでしてね。」そして、彼は、彼がひどく好いてゐたリギイ山の歌の文句を、ほつ／＼佛蘭西語に翻譯しながら、繰返し始めた。

「リギイに行くなら、

ウエギイまでは、靴は要らない、

そこまでは、小蒸汽船が行くわいな、

ウエギイから先きは丈夫な杖持つて、

娘ツここに腕かして、

かしま立ちには、

お酒を一杯飲ましてやんせ、

お酒のがぶ飲み謹ましてやんせ、

そこで飲むなら、何はさて、

酒飲む資格が入用ぢや。」

『おー、立派な歌だ……』と彼は、お終ひになつた時に云つた。  
下僕たちも、明かにこの歌が氣に入つたやうであつた、何故といふに、彼等は私たちに近づいて来たから。

『あゝ、しかし、その音曲を作つたのは誰だね。』と私は尋ねた。

『お、誰も作つたものは無いんです。全く、御存知のやうに、外國人のために唱ひに行かうとするには、何か新しいものが必要ですからねえ。』

氷が運ばれたので、私が三鞭酒の洋杯を私の相手に與へた時に、彼はやゝ極り悪るさうにした、そして、下僕たちの方をチラと見て、彼は振り向いて、腰掛の上で身體をもちつた。

私たちは、あらゆる藝術家の健康を祝して、私たちの洋杯に觸れた。彼は洋杯の酒を半分飲んだ、それから彼は考を集めてゐるやうに見えた。そして深い考に沈むやうに彼の肩に鞆を寄せた。

『こんなお酒を頂いたのは、ずるぶん久しぶりでございます、Je ne vous dis que ça (確かに)伊太利では、Vino d'asti (アスチ葡萄酒)が一ばん良い酒ですが、これはそれよりもよつと良い酒です。おー！伊太利、あそこは素敵です。』

『さうだね、あそこでは、みんなが、如何に音楽と藝術家を鑑賞すべきかを知つてゐる。』と私は、シュワイツェルホフ館の前の今夜の不幸を彼に憶ひ出させやうとして、云つた。

『いゝえ。』と彼は答へた。『あそこでは、音楽に關係のあることでは何でも、私は誰をも満足させることが出来ません。伊太利人は、みんな音楽家ですよ——世界中で伊太利人のやうな人民は何處にもありません。ですが、私はたゞチロルの顔を知つてゐるんです。そのチロルの顔が、伊太利人には何となく珍らしいんですよ。』

『では、君は、伊太利ではもつと寛大な紳士に出會ふだらう、さうぢやないかね。』と私は、シュワイツェルホフ館の泊客に對する私の謝儀を彼に願たしむるのを惧れながら、云つた。『あそこでは、金のある人たちが屢々行くそんな大旅館を見付けるのは不可能だらう。そこでは、百人の人が藝術家の歌を聴いて、その中の一人も彼に何にも與へないといふやうな。』

私の疑問は、私の期待した結果を得る事が全く出来なかつた。彼等に對する私の怒りが、彼の頭腦には入らなかつた、それとは反對で、彼は、私の言葉の中に、彼の天分に對する輕視が含まれてゐて、それがために報償を得ることが出来なかつたのだといふ風に取つた。で、彼は大急ぎで、私の前へ眞直ぐに向き直つて、『いつでも何か得られるといふ譯ではないんですよ。』と云つた。『時とすると、聲が良くないことがありますし、疲れてゐることがありますよ。今日なども、私は十時間歩いて、殆んど断えず唱つてゐたのです。それは六ヶ敷しいんですよ。そして、こゝの偉い華族様たちは、いつでもチロルの歌を聴きたがりにはなさないんですよ。』

『だが、それだと云つても、どうして彼等は喜捨をしないでゐられるんだ。』と私は云つた。彼には、私の言葉が解らなかつた。

『それは、何でもありません。』と彼は云つた。『しかし、こゝでの、重要なことは、On est tres serré pour la police. (人が警察のために壓迫を蒙つてゐるんです。——の意)それが煩さいんです。こゝでは、共和國の法律で、唱ふことは許されません。が、伊太利では、好きな所へ行けるんです、誰も一言だつて云ひませんや。こゝでは、警官が許したいと思へば、許せるんですが、許したくなかつたら、牢屋の中へ投り込むことが出来るんですよ。』

『何だつて、それは信じられないよ。』

『え、それは眞實なんですよ。あなたが一度注意を受けて、又唱つてゐるのを見付けられると、彼等はあなたを牢屋に入れるんです。私は一度、三ヶ月牢屋にゐたことがあります。』と彼は、それが彼の最も愉快な追憶の一つであつたかのやうに微笑みながら云つた。

『やア！ それは怖ろしい！』と私は叫んだ。『どういふ理由だね。』

『それが、新しい共和國の法律の一つだからですよ。』と彼は、活氣づいて来て、説明を續けた。

『こゝでは、あの人たちには、貧乏人がどうにかしてその生活費を儲けなくちやならないといふことが解らないんです。もし私が不具者でなかつたら、私は働きたいんです。ですが、私は、私の歌で世

『あなたがどうなさりたいんだか私は知つてゐますよ。』と彼は、私に向つて眼を瞬いて、指で私を脅かしながら、云つた。『あなたは、私がどうなるか御覽になるために、私を酔はせたいと思つてゐるつしやるんです。だが、それはいけませんよ。その御満足をなすつちやいけませんよ。』

『どうして僕が、君を酔はせなくちやならないのか。』と私は尋ねた。『僕は君を愉快にしたいと思ふだけだよ。』

彼が私の主張をそんなに粗暴に解釋して私を怒らしたことを、彼は實際氣の毒に思つたらしかつた。彼は、間違つて、立上つて、私の肘に觸つた。



「いや、いや。」と彼は、彼の濡れた眼で、懇願するやうな表情で云つた。「戯談を申上げただけでよ。」

そして、直ぐその後で、彼は、何にせよ私が立派な若者であるといふことを云ひ表はさうとして、何かしらひどく粗朴な、俗語を用ひた。「Je ne vous dis que ça.」（確かに）と彼はお終ひに云つた。かういふ風にして、巡禮樂人と私とは飲んだり、話したりし續けた。そして、給仕人たちは、無作法に私たちを見詰め續けて、私たちを嘲笑してゐるやうに見えた。

私たちの會話は、私の中に興味を生じたにも拘らず、私は、彼等の動作を注意せずにはゐられなかつた。そして、私自身は、私はだん／＼腹立たしくなつたのであつた。

給仕人の一人が立上つて、小男に近づいて、彼の頭の頂上を眺めて、微笑み始めた。私は既に、この旅館の同宿人に對する憤怒で一ぱいになつてゐた、そして、まだ誰かにそれをぶち撒ける機會をもたなかつたのであつた。で、今、私自身は、この給仕人の聽衆によつて、最高度に焦々してゐたのであつた。

門番が、帽子を脱らずに、部屋へ入つて來た。そして、私の傍に坐つて、肘を突いて、卓子に寄りかゝつた。私の威嚴と自尊心をひどく侮辱したこの最後の場合が、すつかり私を怒らせて、その背ちう私の中に煮えくりかへつてゐた憤怒の全體に濕口を與へた。何故、前に彼が私に會つた時は、あんな

なに謙遜に頭を下けたのか、そしてこの時、私が旅の巡禮樂人と一緒に坐つてゐるからと云つて、彼がやつて來てそんなに無作法に私の傍に坐つたのかを私は心の内で訊いて見た。私は、私が自分の中にもつてゐた養えたつてゐる、腹立たしい、憤慨によつて全然支配されてゐた。その憤慨は、私に活氣を與へ、僅かの時間の間だけではあるが、或る異常の柔軟性と、精力と、私の肉體上及び精神上の能力全體に於ける力とを私に與へるが故に、それが私の中に起る場合には、私は時とするとそれを刺激せんと努めたものである。

私は突如として立上つた。

「笑つてゐるのは誰だ。」と私は、給仕人の方に向つて叫んだ、と、私は、自分の顔が眞青になつて、自分の唇が知らず識らず結ばれるのを感じた。

「俺は笑つてやしない。」と給仕人は、私から遠のきながら、答へた。

「いや、貴様だ、貴様がこの紳士を笑つてゐるんだ。では、何の權利があつて、貴様は、お客がゐるのに、やつて來て、こゝへ坐つたんだ。坐れるなら、坐つて見い！」

門番は、何か吹きながら、立上つて、入口の方へ向つた。「何の權利があつて、貴様はこの方を愚弄するんだ、この人はお客だし、貴様は給仕人なのに、この人の傍に坐るんだ。何故、貴様たちは、宵の口晚餐の時に僕を笑はなかつたんだ。やつて來て僕の傍に坐らなかつたんだ。この人が醜い着物を

着てゐて、街で唄ふからと云ふのか。それが理由なのか。そして、僕がこの人より好い着物を着てゐるからと云ふのか。この人は貧乏だ、しかし、この人は貴様たちよりは千倍も善い人なのだぞ。それに間違ひはないんだ。何となれば、この人は決して誰にも侮辱を加へたことかないが、貴様たちは、この人に侮辱を加へたことかないか？ 貴様たちは、この人に侮辱を加へたぢやないか。」

「私は何も譯があつたんぢやなかつたんだ。」と私の敵の給仕人が答へた。「私が坐つて、この人のお邪魔をしたんでせう。」

給仕人は、私の云ふことが解らなかつた。私の獨逸語は、彼に對しては浪費であつた。無作法な門番は、給仕人の味方をしようとしてゐた。が、彼が私を了解しないやうな風をして、手を振つたほど私は激しく、彼に襲ひかゝつた。

尙僕の血洗女は、私の憤怒に充ちた状態を見て、事件の起るのを怖れたので、いや、多分私の意見に賛成して、私の味方となつたので、私と門番との間へ進んで来て、私が正しいのだから、何も云はないやうにと門番に告げ、それと同時に、私が自ら氣を静めるやうに私に強請した。

「Der Herr hat Recht ; Sie haben Recht.」 (旦那は御尤もなんです。あなたは御尤もなんです。——の意。 )と彼女は繰返へし／＼云つた。巡禮樂人の顔は、ひどく可哀相な、恐怖を感じた表情を現はしてゐた。そして、明かに、彼には、何故私が怒つたか、私が何を要求してゐるのかと解らなかつ

た。で、彼は成るべく早く立去りたいと私に強請した。

けれども、憤怒の雄辯が、ます／＼私の中に燃え上つて来た。私には一切の事が想ひ出された——群集は、あの男を嘲笑したのであつた。それから、あの男の聴衆は、あの男に何物をも與へなかつたのであつた。で、どんなことがあつても、私は平靜に復することを欲しなかつた。

私は信ずる、若し給仕人たちがあんなに従順でなかつたならば、私は悦んで彼等と闘ひ、何の防禦もない英國人の令嬢を打つたに違ひない。若しその時、私がセワストーポリにゐることゝすれば、私は悦んで英國人の墮擧の中で虐殺を行ふことに熱中したに違ひない。

『では、貴様は何故、この方と僕をこの部屋へ連れて来て、他の部屋へ連れて行かなかつたのだ。えッ？』と私は、逃げないやうに門番の腕を捕へて、怒鳴つた。「何の権利があつて、貴様は、この方はこの部屋で給仕さるべきで、他の部屋ではさるべきでないといふことを、この方の外貌で判断したのか。金を支拂つてゐる客はみんな、旅館では平等の権利をもつてゐないのか。共和國だけではなく、全世界ではだ！ 何んだ、貴様たちの下劣なこの共和國は！……平等、實際さうだ！ 貴様たちは、英國人をこの部屋へは連れて來られないだらう。この人の音楽を無料で聴いたあの英國人たちなら尙更のことだ。つまり、彼奴等は各自でこの人に渡すべき筈の二三サンチムを盗んだんだ。どうして貴様たちは、僕等をこの部屋へ連れて來たのだ。」

『あの部屋は閉つてゐましたから。』と門番が云つた。

『いや。』と私は叫んだ。『それは嘘だ。あの部屋は閉つてはゐない。』

『ぢや、あなたが一ばんよく御存知ですね。』

『知つてるとも、貴様が嘘をついてゐるといふことを僕はよく知つてゐる。』

門番は、私に背を向けた。

『え！では、どうすればいゝんですね。』と彼は呟いた。

『どうすればいゝ？』と私は叫んだ。『直ぐ僕たちをあの部屋へ連れて行け！』

血洗女の警告や、歸りたがつてゐる巡禮樂人の請願にも拘らず、私は給仕人頭に會ふことを主張した。そして、私の客と一緒に大きな食堂へ行つた。給仕人頭は、私の怒つた聲を聞き、私の威嚇的な顔を見て、喧嘩を避けた。そして、賤しむべき従順をもつて、私が好きな處へ何處へ行つてもいゝと云つた。門番は、私が廣間へ行く前に、大急ぎでなくなつてしまつたので、私は、彼が嘘をついたのだといふことを證明することが出来なかつた。

食堂は、事實開いてゐて、明るかつた。そして、食卓の一つに、一人の英國人と婦人とが坐つて、晩飯を喰べてゐた。私たちは、別の食卓に案内されたのだが、私は英國人がゐたその食卓へ穢い巡禮樂人を連れて行つて、給仕人に手をつけた罐をそこへ持つて来るやうに命じた。

二人の客は、最初驚愕の眼で、次ぎには憤怒の眼で、生きてゐるといふよりは死んだといふ方がいゝ、私の傍に坐つてゐる小男を見た。彼等は、低聲で話をしてゐた。それから、婦人はその皿を押して、違つて、絹の着物の衣擦を響かした。そして、二人とも部屋を立去つた。硝子戸を通して、私は、その英國人が給仕人に怒つた聲で何か云つて、手で私たちの方向を指さしてゐるのを見た。給仕人は、入口から頭を出して、私たちを見た。私は、愉快な豫感をもつて、誰かどやつて来て、私たちに何と命令するのを待つてゐた。何となれば、その時こそは、私は、私の憤怒全體に對する充分な漏口を見出すのであるから。けれども、幸ひにも——その時は、私は侮辱を感じたが——私たちに何事も起らなかつた。前には、酒を飲むのを極り悪るがつてゐた巡禮樂人は、この時、出来るだけ早く逃げだしたために、一生懸命で、燻の中に残つてゐた全部を飯んだ。

けれども、彼は、響應に對して、深い感情をもつて彼の感謝を表はしてゐたやうに私には見えた。彼の濡ふた眼は、もつと濕ひ、もつと輝やいて来た。そして、彼は、感謝の最も奇妙な、最も複雑した文句を用ひた。でも、誰でもが私のしたやうに藝術家を待遇するのは非常に良いことだと云つて、最後に私のあらゆる幸福を祈つた彼の文句は、私には非常に嬉しかつた。私たちは一緒に立關へ出かけて行つた。そこには、下僕たちと、私の敵のかの門番が立つてゐた。門番は、明かに、みんなの前で私のことを訴へてゐた。彼等はみんな、私が氣が狂つた人でゝもあるやうに私を見てゐるのだと、

私は考へた。その下僕たちの全聴衆の前で、私は小男を全く對等の人として取扱つた。それから、私  
が自分の動作で表はし得るあらゆる尊敬をもつて、私は帽子を脱つた。そして、乾いた、堅い指のあ  
る彼の手を握つた。

下僕たちは、私に極く僅かの注意すらも拂はないやうであつた。彼等の一人が、皮肉な笑ひを漏ら  
しただけであつた。

巡禮樂人が頭を下けて、暗黒の中に消えてしまふや否や、私は二階の自分の部屋へ行つて、すべて  
のかういふ印象や、あんなに思ひ掛けなく私に起つた、馬鹿氣た、子供らしい憤怒を睡眠で拂ひ去ら  
うと思つた。けれども、眠るにはあまりに亢奮してゐることが分つたので、私は、私の平靜を回復す  
るまで散歩するつもりで、それから、白狀するが、偶然に門番か、給仕人か、英國人かに出逢つて、  
彼等にあらゆる彼等の無作法を、就中彼等の不公平を思ひ知らせることが出来ればいふといふ秘密な  
願ひをもつて、もう一度街へ出かけて行つた。けれども、私を見て背を向けたかの門番以外には、私  
は誰にも會はなかつた。で、私は、埠頭に沿ふて、全然一人で、散歩をし始めた。

『あれが、詩歌の不思議な運命だ。』と私は、やゝ穩かになつた時に、自分に云つた。『すべての者が  
それを愛してゐる。すべての者がそれを探求してゐる。それは、人間が愛し求めてゐる人生に於ける  
唯一のものなのだ。けれども、誰もその力を認めないし、誰も世界のこの最良の財寶を尊重しない。』

そして、それを人々に與へた人は、報ゐられない、お前たちが好む如何なる人にも向つて、シユワ  
イツェルホフ館の泊客全體に向つて、世界に於ける最も貴い財寶が何であるかを訊いて見るがよい。  
全部が、若くは百人中の九十九人までが、心からならぬ表情を浮べて、世界中で最も良いものは金で  
あると答へるだらう。

『かう云へば多分君を悦ばさないだらう。若くは君の高い思想に一致しないだらう。』と主張する  
だらう。『しかし、金だけが人間に幸福を與へ得るやうに人生が出来てゐるとしたら、どうすればい  
のだらう。僕は、自分の心を押しつけることは出来ないね。有るがまゝの世界を見るなと云つて。』と  
云ひ添へるだらう。(即ち、眞理を見ろと云つて、だね。)

『お前の智識、お前が願つてゐる幸福は、何て哀れむべきものであらう！では、お前は、不幸なる  
者よ。お前自身、何を自分が欲してゐるかを知らないんだ……何が故に、お前はお前の祖國、お前の  
親戚、お前の金儲けの商賣や職業を捨て、この小さな瑞西の市街なるルセルンに來たのか。何故、  
お前たち全體は、今宵露臺に集まつて、恭々しい沈黙をもつて、小さな乞食の歌を聞いたのか。そし  
て、もし彼がもつと永く唱ひたいとしたのであつたら、お前たちは、もつと永く沈黙して、聞いたで  
あらう。どうだ！金は、たとへ數百萬を積んでも、お前たち全體をお前たちの國から追ふて、ルセル  
ンといふこの小さな偏僻の處へお前たち全體を連れて來ることが出来るか。金は、お前たちを露臺の

上に集めて、半時間の間、黙つて、動かすに、立つてゐさせることが出来るか。否！たゞ一つの物が  
お前たちをさうさせるので、その物は、人生のあらゆる他の衝動よりも、強い影響をもつてゐるのだ。  
お前たちが知つてゐても、それを思ひ浮べることの出来ない、しかし、それを感ずることの出来る詩  
に對する憧れは、お前たちが人間の感覺をもつてゐる限りは、いつでも感じられるのだ。「詩」といふ  
言葉は、お前たちには嘲りの言葉なのだ。お前たちは、それを一種の嘲弄的な非難の言葉として用ひ  
るのだ。お前たちは、詩に對する愛を、子供たちや馬鹿娘たちに似合ふものと見做してゐる。で、そ  
れがために、詩に對する愛を馬鹿にするのだ。お前たちは、お前たち自身のために、もつと明確な何  
ものかを持たなくちやならない。

「しかし、子供等は、健全な方法でもつて、生活を見てゐる。彼等は、人間の愛すべき筈のものと、  
幸福を與へるものとを認めて、それを愛してゐる。が、生活はお前たちを欺き、且つ墮落させて、お  
前たちが眞に愛するそのものを嘲笑し、お前たちが憎むものと、お前だけに不幸を與へるものとを求  
めさせるに至つた。

「お前たちは、こんなにも墮落してゐる。お前たちは、お前たちに純な悦びを與へた貧しいチロル  
人に如何なる義務を負ふてゐたかを察知しなかつた。そして、それと同時に、お前たちに快樂も利益  
も與へずして、寧ろお前たちをしてその快樂と便益とを犠牲にせしめる或る主君の前に、故なくして  
屈服せしむるを得ないのをお前たちは自ら感じてゐるのだ。何といふ奇怪なことであらう！何といふ  
了解し難い没道性であらう！

「しかし、今晚、私に強い印象を與へたものは、この事ではない。私は、幸福を與へるすべてのもの  
に對するこの盲目や、詩的享樂に對するこの無意識は、大抵了解することが出来る。私は自分の生  
涯の行程に於て、到る處でその事に遭遇してゐるから、妙くともそれには馴れてゐる。群集の粗暴な、  
無意識的な野卑は、私にとつては奇らしくない、一般人の感情を辯護する者はいつでも、かう云ふか  
も知れない。群集は、必らず極めて善良ではあるが、その野鄙な、動物的方面のみで互に接し合つて  
ゐる人民の結合であつて、人間性の弱點と粗暴のみを現はしてゐるに過ぎない、と。しかし、慈悲深  
い人の子供等であるお前たち、基督教徒であるお前たち、純朴な人民であるお前たちが、お前たちに  
純な享樂を與へた貧しい乞食に報いるに冷淡をもつてし、これを嘲笑するとは何事であるか。いや、  
さうではない、お前たちの國には、乞食の救養院があるのだつた。乞食はゐらないのだ。一人もゐる筈  
がないのだ。で、同情といふ感情もある筈がないのだ。しかし、この事は、乞食が存在するといふ告  
白ではあるまいか。

「が、かの乞食は、働らいたのだ。お前たちに享樂を與へたのだ、彼は。お前たちが利益した彼の  
勞働に對する報酬として、お前たちの餘物を何か貰ひたいとお前たちに乞ふたのだ。それに、お前た

ちの高い立派な宮殿で、骨董品の一つを眺めるやうに、冷淡な微笑をもつて彼を眺めたのだ。そして幸福と富とで恵まれたお前たちの一百人がそこにゐたけれども、その中の一人の男も、一人の女も、彼に一スウを與へなかつたのだ。彼は、耻ぢて、お前たちから立去つた。そして、思慮無き群集は、笑ひながら、後を追ひ、且つ嘲笑した。お前たちに非ずして彼を。何となれば、お前たちは、冷淡で、無作法で、卑しなかつたからだ。何となれば、彼がお前たちに與へた快樂を受けるに當つて、お前たちは彼から盗んだので、かういふ理由で、群集は彼を嘲弄したのだ。

「一八五七年七月七日に、富める人々の泊つてゐたシニウイツル・ホテルの前で、漂泊せる乞食の一巡禮樂人が、三十分の間、彼の歌を唱ひ、その六絃琴を奏でた。百人ばかりの人が、それを聴いてゐた。巡禮樂人は、三度、すべての人に何かを與へてくれと乞ふた。誰一人として、彼に一物をも與へなかつた。そして、多くの者が、彼を愚弄した。」

「これは、作り事ではなくて、實際の事實である。で、希望する人は、七月七日シニウイツルホテルに泊つた人々の宿泊名簿を参照すれば、自らそれを明かにすることが出来るのである。」

「これは、現代の歴史家が、不滅の炎を有する文字をもつて記述すべき一事件である。この事件は、種々の新聞や歴史よりも一層味はふべく、一層重大にして、一層深き意義に充ちてゐる。支那人が、その國土にはジャラ／＼鳴る貨幣が満ち溢れてゐるので、金のために物を賣らうとしないからと云つ

て、英人が數千の支那人を虐殺したこと、亞弗利加には小麥がよく出来るし、且つ不斷の戦争が、軍隊の訓練には重要であるからと云つて、佛蘭西人が數千のカバイル人を虐殺したこと、ネーブルス駐劄の土耳其公使が、猶太人であつてはならないこと、それから、皇帝ナポレオンが、プロムビエールを巡遊して、その人民に、彼が人民の意志に一致順應してのみ治世するといふ確證を示めたこと——すべてかういふ事柄は、永い間知られてゐた或る事柄を暗くし、若くは明かにする言葉である。けれども、七月の七日にルセルンに起つた一挿話は、私には全然珍奇なものやうに見える。そして、それは、人性の永久的な醜惡面とは關係がなく、社會發達上の著明なる或る時期に關係があるのだ。この事實は、人間の活動の歴史に關係があるのではなく、進歩と文化の歴史に關係があるのだ。

如何なる國——獨逸、佛蘭西、若くは伊太利——に於ても有り得べからざるこの無慈悲なる事實が文化と、自由と、平等とが、進歩の最高の程度に達し、最も開化せる國からの最も開化せる旅人が集合する此處では、全く有り得べきだといふのは、何が故であるか。一般に尊敬すべき如何なる人間的な行動をも爲し得る、かういふ教養ある人間どもが、一つの善行に對して、心からの、人間的な感情を持たなかつたのは、何が故であるか。かゝる人々が、その宮殿や、その會話や、その實際社會では、印度に於ける獨身の支那人の状態や、基督教の擴張及び亞弗利加に於ける教育や、あらゆる完全に達せんがための實際社會の組織に就ては、心から働くのは、何が故であるか——彼等が、その靈魂の中に、

人間的な同情の單純にして素朴なる感情を見出さないのは、何が故であるか。かゝる感情は、全然消滅したのか、そして、その代りに、彼等の宮殿や、會合や、交際社會に於て、これ等の人々を支配してゐる虚榮、野心、及び貪婪が起つたのか。吾々が文明と呼ぶ、かの合理的な、個人主義的な、人民の聯合の擴張は、本能的にして愛すべき聯合に對する欲望を破壊し、それを無力にしてしまつたのか。それがために多くの血が流され、それがために多くの罪が犯された。かの誇るべき平等なるものは、かういふ事であるのか。各國民が、子供のやうに「平等」といふ言葉の單なる響きによつて幸福にされ得るといふのは、有り得べきことだらうか。

「法律の前では平等である？ 人民の全生活は、法律の範圍内で回轉するの？ その千分の一が、法律に従へられてゐるに過ぎないのだ。殘餘のものは、法律以外にあるのだ。習慣と社會の諸本能の範圍内にあるのだ。」

「しかし、社會に於ては、從僕は、巡禮樂人よりも立派な着物を着て、害を加へず彼を侮辱してゐる。私は從僕よりも立派な着物を着て、害を加へず彼を侮辱してゐる。門番は、私を彼自身よりも地位が高く、巡禮樂人を彼自身よりも地位の低いものと考へてゐる。私が巡禮樂人を私の相手にした時に、門番は、私たち二人と同等であると感じて、無作法な勞動をした。私は、門番に對して不慮であつたが、門番は、彼が私よりも劣つてゐることを認めてゐた。給仕人は、巡禮樂人に對して不

慮であつたが、巡禮樂人は、給仕人よりも劣つてゐるといふ事實を承認してゐた。

「そして、人々はこの政府を自由と呼んでゐるが、一市民が、何人をも害せず、又何人をも妨害しないのに、餓死から自分を防ぎ得るただ一つの事をするからと云つて、彼を牢獄に投げ込むかの政府は自由であるのか。」

「積極的解決の熱望をもちながら、善と惡の、結合と矛盾の、この永久的に動搖する無限の海洋に投込まれてゐる人間は、憐めな、憐むべき動物である。幾世紀も、人間は、一方の側に善を、他の側に惡を置かうとして、苦闘努力し來つた。幾世紀も過ぎ去るであらう。そして、偏見を有せざる人が、善と惡の間の均合が何處にあるかを決定せんとどれ程努力し得るか。兎に角、秤は桿を傾けやうとはしないであらう。そして、いつでも、各の秤皿には、善と惡の同量があるであらう。」

「望まじきは、たゞ、人間が、判斷をなすことを學び、粗糞にして専門的な思想に陥らず、深刻にして、永久に答へられない疑問に答へないことを學ぶにある！ 望まじきは、たゞ、人間が、如何なる思想も嘘と眞實の兩方であることを學ぶにある！——嘘は、片手落ちのためであり、すべての眞理を認めるのに人間が無能力であるためであつて、眞理は、人間の努力の一面をそれが現はすからである。この永久的に動亂せる、果てし無い、不斷に混亂せる、善と惡の混濁には、區分がある。人々は、この大洋の上に想像の線を描いた。そして、人々は、大洋が實際にかく區分されてゐることを論争して

る。

『しかし、他の方面には、これに絶對に違つた見界から來た、他の數百萬の有り得べき小區分があらはれないか。確かに、これ等の新たな小區分は、數百萬の異つた區分が過去の幾世紀に於て行はれたやうに、來るべき幾世紀に於て行はるゝであらう。』

『文明は善であり、野蠻は惡である。自由は善であり、束縛は惡である。今や、この想像の知識が、人間性の中にある善に對する、本能的にして、美しい、原始的な熱望を絶滅せしめてゐる。では、誰が、何が自由であり、何が專制主義であり、何が文明であり、何が野蠻であるかを私に説明してくれらう。』

『これ等のものを分割する境界線は、何處にあるのか。そして、誰の靈魂が、この急速に推移する、複雑な種々に事實を量り得るやうな絶對の善惡の標準をもつてゐるのか。誰の機智が、返へらぬ過去に於けるすべての事實を理解し、考量し得るほどに大きいのか。そして、誰が、その中に善と惡の結合がない或る場合を發見し得るのか。そして、私は、一方よりも他の方を餘計に見ることを知つてゐるが、それは私の立脚點が惡いからではないのか。それから、誰が、たとへ一瞬間でも、上から人生を見得るやうに、人生から絶對に自分を離す能力をもつてゐるのか。』

『吾々は、一つの、たった一つの間違ひの無い案内者をもつてゐる——總體としての、諸單位としての萬象を透貫する普遍的な精神、正義に對する熱望を吾々の各自に賦與した普遍的精神をもつてゐる。樹木を太陽の方に生長するやうに促し、秋季にその種子を撒布らすやうに花を刺激し、吾々の各自が互に接近しないではゐられないやうにするこの精神をもつてゐる。そして、この誤らざる、鼓舞的な聲は、教養の騒々しい、忙がしい發達よりも聲高く響くのである。』

『誰がより偉い人間で、誰がより野蠻人であるのか——巡禮樂人の擦り切れた着物を見て、怒つて食卓を立去り、巡禮樂人への報酬として、彼の所有物の百萬分の一をも與へずに、そして今では、その立派な、心地よい部屋に懶けに坐つて、支那に起つてゐる事件に就て靜かに考察し、其處で行はれた虐殺を正當なりと考へてゐるかの貴族と、その衣囊に一フランを持ち、入牢の危険を冒して、山を越え、谷を下り、二十四年の間漂泊を續けて、人々が彼を嘲弄し、殆んど彼を人道の圍ひの外に投げ出してゐるにも拘らず、彼の歌をもつて人々の心を樂ましめ、そして、疲勞と寒さと耻辱との中に、彼の穢い藁の上に眠るために——誰一人何處へ行つたかを知つてゐる者はないのだ——立去つたかの巡禮樂人と。』

この途端に、市街から、夜の死の沈黙を通して、遠い、ずつと遠い彼方に、私は、かの小男の六絃琴と彼の聲とを捕へた。

『いや。』と或るものが、ひとりでに私に云つた。『お前は、かの小男を憐み、若くはその富に對して』



かの貴族を非難する権利をもつてゐない。誰か、これ等の人の各自の靈魂の中に見出さるゝ内面の幸福を考量することが出来やうか。あの男は、泥濘道の何處かそこいらに立つて、明るい月光の空を見詰めて、微笑する香はしい夜の中で、愉快に唱つてゐるのだ。彼の靈魂の中には、非難も、怒りも、悔恨もないのだ。そして、かの贅澤な立派な部室にゐるすべてのかの人々の心の中に、今何が起つてゐるかを誰が知つてゐるやうぞ。彼等がみんな、かの小男の靈魂の中にあるのと同じだけの、生活に於ける障害の無い、甘い悦びと、世界に對する満足をもつてゐるかどうかを、誰が知つてゐるやうぞ。

『すべてのかういふ矛盾を許し、それを作つた神の恵みと智慧は無敵である。大膽にも、無法にも、神の法則と、神の企圖とを量らんとするお前に丈は——お前にだけは、さういふものが矛盾に見えるのだ。』

神は、爰に立ちて、その輝やく、計り知られぬ高さから、見下して、無限の調和——その中で、お前たちみんなが、無限の矛盾の中を動き歩いてゐるのだ——を悦び給ふのだ、お前は、誇りをもつて、宇宙の法則から自分を離すことが出来るのはお前自身だと考へた。いや、お前も亦、給仕人に對するお前の小さな、輕蔑の憤怒をもつて——お前も亦、永久的なものや無限なものに對する調和のある熱望を亂したのだ。』……(完)

## ゲーム取人の手記

何でも、三時頃だった。お客様たちは玉を突いてゐた。吾々どもの仲間で大いなる見馴れぬ人と呼んでゐる人がゐた。公爵もゐた——二人はいつも一緒だった。口髭のある貴族の若様もゐた。小柄な騎兵で、俳優だったオリウエルさんもゐた。波蘭の貴族もゐた。かなりの人数だった。

大きな見馴れぬ人と公爵とは、勝負を争つてゐた。その時、俺は棒を持つて、十と四十七、十二と四十七——と断えず勘定しながら、玉突臺の周圍を彼方此方歩き廻つてゐた。

誰も彼も、勘定するのが俺たちの仕事だと思つてゐるんだ。一口物を喰べようとしてもいけないんだ。夜の二時まで床に入つてはいけないんだ。そして、断えず球を持つて来るやうに怒鳴り續けてゐなくちやならないんだ。

俺は勘定を續けてゐた。と、俺は新たな貴公子が入口へ入つて來たのを見た。その人はデロ〜と眺め廻はして、それから、安樂椅子に坐つた。占めた！

『さア、あれは誰だらう。』と俺は腹の中で思つた。『誰かには違ひない。』

彼の着物は小瀟洒してゐた。凡てが新調のやうに小瀟洒してゐた——市松模様、手編絨の洋袴、氣取つた、小さな、短かい上衣、絹綿天鵞絨の胸衣、それから金鎖とそれにぶら下つてゐるさまざまの飾金具。

彼は小瀟洒とした衣装をしてゐた。この人には、もつと小瀟洒してゐる所があつた。すらつと丈が高かつた。髪は前の方で恰好よく刷毛目を見せてゐた。その顔は美しく、赤い——いや、一言で云へば、立派な青年だ。

吾々は職業上あらゆる種類の人々と接觸しなくちやならない。で、あんまり偉くない人も澤山來るし、貧乏なやくざ者もかなり來るのだ。だから、數取人には過ぎないが、始終いろんな人と話をする機会を持つてゐるんだ。で、どうかすれば、一寸した事位は覺える事も出来るんだ。

俺は、貴公子を眺めた。貴公子が、誰にも分らないやうに、雅かに、靜かに坐るのを俺は見た。そして、彼が着てゐる着物が全く新しいので、俺はかう思つた。『あの人は外國人か——多分英國人だらう——さうでなければ、今着いたばかりの伯爵だらう。まだ若い、何處か風采に高貴なところがある。』オリヴェルが彼の次ぎへ坐つたので、彼は少し動いた。

彼等は、勝負を始めた。大きな人が負けた。彼は俺に對つて怒鳴つた。彼はかう云つた。『お前はいつも欺してゐるな。お前はちやんと勘定しないんだ。何故お前はよく見てゐないんだ。』

彼は吐り飛ばしておいて、撞棒を振り出して、出掛けて行つてしまつた。さア、一寸考へて見ろ！  
夕方彼と公爵は、銀貨五十ルーブリの賭をした。それに今は、マコン葡萄酒を一罎負けただけなのに、  
氣が荒くなつてゐる。あゝいふのが、この人の性質だ。

いつか彼と公爵は、夜の二時迄勝負をした。二人は、現金を賭けてゐなかつた。で、俺は二人とも  
現金を持つてゐないから、嚇かし勝負をやつてゐるんだと思つてゐた。

「僕は二十五ルーブリ賭けるよ。」と彼は云つた。

「よろしい。」

一寸欠伸をして、立停つて球を置きもしないで——なア、彼は石で出来てゐるんぢやないんだ——  
彼が何と云つたか考へて見ろ。「僕たちは金を賭けて勝負をしてゐるんだ。」と彼が云ふんだ。「賭けずに  
やつてゐるんぢやない。」

で、この人が、他の誰よりも俺を苦めるんだ。やがて、大きな人が出て行くと、公爵が新しい貴  
公子に云つた。「如何ですな。」と彼が云ふんだ。「僕と勝負をやりませんか。」

「やりませう。」と貴公子が云つた。

貴公子はそこに坐つてゐた。一寸馬鹿のやうに見えた。事實さう見えたんだ。實際は勇氣があつた  
のかも知れないんだ。で、兎に角、彼は立上つて、玉突臺に近づいたが、前のやうに顔を赧らめはし

なかつた。實際彼は顔を赧らめてはゐなかつた。しかし、いくらか不安を感じてゐたのは、見逃がす  
ことが出来ない。

着物があんまり新らし過ぎたのか、それとも、みんなが彼を見てゐるので當惑してゐたのか、兎に  
角、彼には勢ひがなかつた。彼は玉突臺ににぢり寄つて、衣囊の端を持ち、撞棒に、聖を塗り始めた。  
そして、聖を落した。

彼は球を撞くと、いつでもあたりを見廻はして、顔を赧らめた。公爵はそんな事はしなかつた。彼  
は玉突臺には馴れてゐた。彼は聖を塗つた。手に聖を塗つて、袖をたくし上げた。彼はひどく小男だ  
が、球を撞くと歩いたり、坐つたりした。

二人は、二三度勝負をした。それから、俺は公爵が撞棒を立て、「お差支へがなければお名前を伺  
はして下さいませんか。」と云ふのを見た。

「ネフリニードフです。」と彼は云つた。

公爵は云つた。「あなたのお父さんは、士官學校の校長でゐらつしやいましたな。」

「さうです。」ともう一人が云つた。  
そして、二人は佛蘭西語で話を始めたが、俺にはそれが判らなかつた。二人は家庭のことを話して  
ゐるんだらうと俺は思つた。

「An revoir」(「またお目にかゝりませう。』の意)と公爵が云つた。「お知己になることが出来て嬉しく思ひます。」彼は手を洗つて、食事に行つた。が、もう一人の方は、撞棒を持つて、玉突臺の傍に立つて、球を叩いてゐた。

人の知つてゐるやうに、新しい客が来ると、抜目なくやらなくちやならんのが俺たちの商賣なんだ。それが一ばん良い方法なんだ。俺は球を持つて、それを置きに行つた。彼は根くなつて、云つた。「もう少しやつてゐてはいけなにかね。」

「ようござりますとも。」と俺が云つた。「玉突臺はそのために立つて行くんでござりますよ。」しかし、俺は彼に注意を向けなかつた。俺は、撞棒を整へた。

「僕と勝負をしようか。」

「いたませう。」と俺は云つた。

俺は球を置いた。

「賭越していたさせうか。」

「どういふんだね——その「賭越してやる」といふのは。」

「それは、と俺が云つた。「あなたは私に半ルーブリ下さるんです。そして、私は卓子の下へ四ツん匁ひになるてんです。」

勿論、彼はそんな事を知つてはゐないので、變に思つて、笑つた。

「やらう。」と彼は云つた。

「よろしうございます。」と俺は云つた。「前以て私に幾許か下さいますか。」

「何だつて——と彼は云つた。「お前は僕よりも拙いのか。」

「さうでござりますとも。」と俺は云つた。

「あなた様に敵ふ人は、こゝには殆んどをりません。」

俺たちは、勝負を始めた。彼は、自分が上手な撞手であると思つてゐるらしくかつた。彼が撞いてゐるのを見るのは興味があつた。ところが、波蘭人がそこに坐つてゐた。そして、一撞毎に怒鳴るのだった。

「あゝ、何ていゝ場だらう！あゝ、何ていゝまい撞きだらう！」

彼は何といふ男だらう。彼の考は良かつたのだが、彼はその考をうまく云ひ現はすことを知らなかつた。で、いつものやうに俺は負けて、玉突臺の下へ四ツん匁ひになつて、ブツ／＼云つた。

すると、オリヴェルさんと波蘭人が椅子から跳び降りて来て、撞棒で叩きながら、賞めをやした。

「素敵だ！もう一度やつて御覽なさい。」と彼は叫んだ。「もう一度。」

「もう一度。」と叫ぶのは當然だ。殊に波蘭人の奴にとつては、彼奴は、半ルーブリのためなら、玉

突臺の下はおろか、「青い橋」の下でも喜んで四ツん匂ひになるだらう！で、彼は真先きに叫んだ。「素敵だ！あなたはまだ埃をお拂ひになりませんか？」

俺——俺は數取人のベトルーシユカだ——のことは誰にもかなりよく知られてゐるんだ。無論、まだ俺の手並を見せないだけなんだ。俺は二度目の勝負も収めた。

「あなた様と勝負をしても私にはとても敵ひません。」と俺は云つた。

あの人は笑つた。やがて、俺が三度目の勝負をしてゐる時に、彼は四十九で俺は零になつた。俺は撞棒を玉突臺の上に載せて云つた。「旦那、みんな賭けることにしませうか。」

「どうして、みんなだ？」

「あなた様の所には三ルーブリあるか、でなければ何にもないんです。」と俺が云つた。

「何うして。」と彼は云つた。「俺は貴様と金を賭けてゐたのか。馬鹿！」

彼は少し赧くなつた。

素敵だ。彼は敗けたんだ。彼は紙入を——きつと英國人の店から買つて来たばかりの、ほんに新しいのを——出して、それを開けた。彼が一寸見えを張らうとしてゐるのが俺に分つた。一ぱい紙幣が——みんな百ルーブリ紙幣ばかり——詰め込んであつた。

「いや。」と彼は云つた。「こゝには細かいものがない。」

彼は、巾着から三ルーブリ出した。「さア。」と彼は云つた。「此でお前の二ルーブリと、こゝの代を拂つて、残りは火酒の代にお前取つてお置き。」

「有難うございます。御親切様に。」俺は彼が素晴らしい男だと思つた。こんな人のためなら、どんな物の下へ四ツん匂ひになつてもいふと思ふ。たつた一つ、彼が金を賭けて勝負するのが嫌ひだと云ふことは情けない。で、俺は考へた。どうかして俺は彼に二十ルーブリ出させなくちやならない。こゝによつたら、四十ルーブリまでは出させることが出来るんだ。

波蘭人は、この青年の金を見たので、云つた。「如何ですな、私と少し勝負をおやりになりませんか。あなたは、非常にお上手ですな。」かういふ詐欺師がこゝいらを澤山徘徊してゐるんだ。

「いや。」と青年は云つた。「失禮します。時間がありませんから。」で、彼は出て行つた。俺はこの男が、この波蘭人が、どういふ人だか知らない。誰か彼をパンとか波蘭人とか呼んだので、それが彼の綽名になつたのだ。毎日彼はいつも玉突臺にゐて、いつでも四邊を見廻はしてゐるんだ。彼はもうどんな勝負にでも手を出してはいけないことになつてゐた。しかし、彼はいつもたゞ獨り坐つて、煙管を出して、煙草を喫つてゐた。が、彼は勝負は上手だつた。

素敵だ。ネフリードフさんが二度目に來た。三度目に來た。度々來るやうになつた。彼は午前と夕方に來るやうになつた。彼は、佛蘭西カラム（譯者註——玉突臺にて一撞きにキュー・ボールを以

て第二第三の球を續けて突く突き方をいふ。)やピラミッド・ボール(譯者註——米國にて行はるゝ十五の球を以て行ふ一種の玉突戯をいふ。)を覺えた——何もかも實によく覺えた。彼は前ほど羞かまなくなつた。誰とも知己になつた。かなり旨く突くやうになつた。無論、金持ちの良家の青年だから、誰も彼も彼を好いた。たゞ『大きなお客様』だけはさうでなかつた。彼は青年と喧嘩をした。

と、事が重大になるのだつた。

彼等はボールをやつてゐた——公爵と、大きなお客様と、ネフリュードフさんと、オリヴェルさんと、まだ誰か他の人とが。ネフリュードフさんは、暖爐の傍に立つて、誰かと話をしてゐた。大きな人の撞く番が来た時、恰度彼の球が暖撞の向側にあつた。そこは場所が非常に狭かつたので、彼は肘を張る場所を得たいと思つた。

で、彼はネフリュードフさんが見えなかつたのか、それとも態とそんなことをしたのかどちらだか知らぬが、撞棒を揮り廻はしながら、ネフリュードフさんの胸をひどく打つた。それは、事實呻聲を出した位だつた。ところが、どうだ。彼は謝罪らうともしなかつた。彼はそれほど無作法だつた。彼はもつと先きまで行つてた。ネフリュードフさんを見ずに、ブツ／＼小言を云ひながらそこを離れた。

『あそこで俺に衝突したのは誰だ。突き損ねてしまつた。さうも狭くていけない。』

相手は紙のやうに蒼白くなつて——しかし、落着いて、彼に近づいた。そして、鄭重に云つた——

『君は先づ謝罪するべきが當然ですね、君は僕を打つたんだから。』と彼は云つた。

『今更謝罪れとは何だ！俺は勝負に勝つ筈だつたんだ。』と彼は云つた。『それに君が俺の邪魔をしたんだ。』

と、ネフリュードフさんは云つた。『君が謝罪するのが當然だ。』

『あつちへ行け！どうあつても、俺は嫌だ。』

ネフリュードフさんは彼に近づいて、彼の腕を捕へた。

『君は、田舎者だ。』と彼は云つた。『ねえ、君。』

あの人は、まるで娘のやうに瘦形の青年であつたが、喧嘩の身構へをした。眼はキラ／＼光つた。彼は相手の男を生きながら喰つてしまふぞとでもいふやうな凄まじい風をした。大きなお客様は、頑丈な恐ろしい男だ。到底ネフリュードフさんの敵ではないんだ。

『なーんだ！』と大きな人は云つた。『お前は俺を田舎者だと云つたな。』かう怒鳴つて、彼はネフリュードフさんを打つために手を振り上げた。

そこで、みんながドツと押寄せて、二人の腕を掴んで、引分けた。

いろ／＼と喋つて後で、ネフリュードフさんは云つた。『あの男に僕の顔を立てさせてくれたまへ。』

あの男は僕を侮辱したんだ。」

「そんな事はどうあつても嫌だ。」と相手は云つた。「顔を立てるなんてことは知らないよ。彼はまだほんの子供ぢやないか、何でもないぢやないか。俺は彼のために彼の耳でも引張つてやらうよ。」

「君が僕の顔を立てたくないといふんなら、君は紳士ぢやない。」  
で、ネフリュードフさんは殆んど怒鳴るやうにかう云つた。

「なる程ね、だが、お前は、お前は小さな子供だ、お前が何を云はうと、どんな事をしようと、俺は腹も立たないよ。」

そこで、俺たちは二人を引分けた——いつもそんな時するやうに、別々の部屋へ二人を連れて行つた。ネフリュードフさんと公爵とは友だちだつた。

「行つて。」とネフリュードフさんが云つた。「どうか彼に道理を説いて聞かせてくれたまへ。」

公爵は、出掛けて行つた。大男が云つた。「俺は誰も怖かアない。」と云つた。「俺はあんな赤坊に辯明をしようとは思はない、俺はそんな事はしたくないんだ。それでお終ひだよ。」

で、みんながこの話を語り合つた。と、やがて、この事件が忘れられてしまつた。たゞ大きなお客様だけは、それからもう来なくなつた。

「この事件——この喧嘩と、俺は云はう——の結果として、ネフリュードフさんは、すつかり親分

株に見做されてしまつた。彼は——俺はネフリュードフさんのことを云つてゐるんだ——腹立ちつほい男だつた。しかし、他のいろんな事には、生れ立ての赤坊のやうに初心だつた。

いつだつたか、公爵がネフリュードフさんにかう訊いたのを覚えてゐる。「君は、誰のためにこゝにゐるんだね。」

「誰のためでもないさ。」とネフリュードフさんが云つた。

「どういふ意味だね——その「誰のためでもない」といふのは！」

「どうして僕がそんなことを。」とネフリュードフさんが云つた。

「どうしたんだね——どうして君がそんなことを？」

「僕はいつでもこんな風に暮してゐるんだ。どうして僕がこれからすつとこんな風に暮してはいけなないんだらう。」

「そんな事を云ふもんじゃないよ。君は今までにしたことがあるかね！」

で、かう云つて、公爵はドツと笑ひ出した。そして、口髭のあるこの貴公子も唇を上げて笑つた。みんなは笑を止めることが出来なかつた。

「何だつて、一度も？」とみんなが訊いた。

「一度も！」

みんなは、腹を抱へて笑つた。勿論、俺には何故みんなが彼を笑つてゐるのかよく分つてゐた。俺は眼を瞬つてゐた。「どうなることだらう。」と俺は考へた。

「来たまへ。」と公爵が云つた。「直ぐに来たまへ。」

「いや、嫌だ。」とネフリュードフさんは答へた。

「さア、そんな莫迦なことを云ふものぢやない。」と公爵が云つた。「来たまへ！」

二人は、出掛けて行つた。

二人は、一時に歸つて来た。二人は晩飯を喰へるために坐つた。客がするぶん群んでゐた。俺たちの第一等のお得意の中の或る人々が——アタノフさんや、ラジーン公爵や、シユスターフ伯爵や、ミルツオフさんが、そして、みんなが、笑ひながらネフリュードフさんに祝辭を述べた。みんなが俺を呼び入れた。俺はみんながひどく陽氣になつてゐるのを見た。

「若様にお祝ひを言へ。」とみんなが叫んだ。

「どうしてですか。」と俺が訊いた。

彼はどんな風にもその事と呼んだか。あの人の手始めと云つたか、それともあの人の進歩と云つたか。俺はよく覚えてゐない。

「私はあなた様にお祝ひを逃べる光榮を持ちます。」と俺は云つた。

と、彼は、顔を眞赤にして、しかし、笑ひながら、そこに坐つてゐた。が、みんなは、彼に戯談を云ひかけなかつた！

何は兎もあれ好かつた。その後で、みんなはひどくはしやいで玉突場へ行つた。そして、ネフリュードフさんは、玉突臺に近づいて、肘を突いて、云つた——

「諸君、君たちには面白いのだらう。」と彼は云つた。「しかし、僕には悲しい。どうして。」と彼は云つた。「僕はあることをしたのだらう。公爵。」と彼は云つた。「僕は、僕の生きてゐる限り、君をも僕自身をも赦すことが出来ないんだ。」

そして、彼は事實涙に咽んだのだ。きつと彼は自分の云つた事が自分にも分らなかつただらう。公爵は、微笑んで彼に近づいた。

「莫迦なことを云ふもんでない。」と彼は云つた。「家へ歸らう、アナトーリ。」

「僕は何處へも行きたくない。」とネフリュードフさんは云つた。「僕は何故あんな事をしたのかなア。」と、涙が彼の頬を傳ふてゐた。彼は玉突臺を立去らなかつた。そして、それでこの話はお終ひなんだ。かういふ事は、若い、世の中の事を知らぬ人にとつて、どういふ意味があるのだらう……

こんな風にして、あの人は度々来るやうになつた。一度あの人は、公爵と公爵の親友でみんながいづも『フェードツカ』と呼んでゐた口髭のある人と一緒に来た。「フェードツカ」は頬骨の秀でた、誰



の目にも飾り気がなく見える人だつた。しかし、彼はいつも小瀧酒した衣装をして、馬車に乗つてゐた。お客様がみんなこの人を好いてゐたのはどういふ譯だつたらう。俺には實際解らない。

『フエードツカーフエードツカー』とみんなが彼を呼んで、彼と一緒に飲食ひしようとした。そして、彼のために金を拂つた。こゝは全く彼の縄張りだつた。彼は敗けても金を拂ひはしなかつた。しかし、彼が勝つときつと金を集めるのを忘れなかつた。時に彼も何か悲しげに見えることがあつた。しかし、彼は公爵と腕を取り合つて散歩してゐた。

『僕がゐなければ、君は駄目だね。』と彼は公爵に云ひくした。『僕はフエードツトだ。』と彼は云つた。『しかし、あのざらにあるフエードツトぢやないよ。』

そして、彼はいつでも、きつと何か戯談を云ふのだつた。で、前に云つたやうに、彼等はその時やつて来て、彼等の一人が云つた。『三人でブールをやらう。』

『よろしい。』と他の者が云つた。

彼等は一賭三ルーブリで勝負を始めた。ネフリュードフさんと公爵が勝負をした。その間始終いゝんな事を喋りながら。

『あゝ！』と一人が云つた。『あの女は何て可愛い、小ぢやな足をしてゐたか考へて御覧。』

『いや。』ともう一人が云つた。『あの女の足なんか何でもないよ。あの女が美しいのは、あの豊富な

髪のせいだよ。』

勿論、彼等は勝負には少しも注意せずに、たゞ互ひに喋り續けてゐるのだつた。

フエードツカは、あの男は、本気で勝負をしてゐた。彼は出来るだけの力を出してゐた。しかし、他の者はみんな本気ではゐなかつた。

で、彼は、二人から六ルーブリづゝ勝つた。彼は公爵に何遍勝つたか知れないんだ。でも、二人が互に金を出したかどうか俺には分らない。しかし、ネフリュードフさんは紙幣を二枚出してフエードツカに渡した。

『いや。』とフエードツカが云つた。僕は君から金を取らうとは思はない。お互ひに清算しようよ。ダブル・オア・クイツ (譯者註——當然自分のものとなる賭物が偶然の機会によりて二倍となるか倍となるか決せらるゝ場合をいふ。)にしてやらうぢやないか——ダブル・オア・ナッシング (譯者註——ダブル・オア・クイツと同じ。)

俺は球を置いた。フエードツカが眞先に突き始めた。ネフリュードフさんは、たゞ戯談にやつてゐるやうに見えた。前に殆んど勝ちかけては、失敗した。彼は云つた。『この場はあんまり容易し過ぎるね、僕はこんな場を好かないよ。』しかし、フエードツカは、自分のやることを粗略にしなかつた。彼は氣輕るに勝負した。そして、思ひ掛けなく勝を得たやうな風をした。

『もう一度二倍賭をやらう。』と彼は云つた。

『よし。』とネフリュードフさんが云つた。

フエードツカが、また勝つた。

『いや。』と彼は云つた。一寸したことであつたんだ。僕は君に大勝ちをしたくないよ。ワンス  
モーア・オア・ナッシング(譯者註——ダブル・オア・クイツに同じ。)にしようよ。』

『よろしい。』

『云ひたいことを云ふがいふ、しかし、五十ルーブリと云へば、かなりの金高だ。ところが、今度は  
ネフリュードフさんの方から云ひだした。『ダブル・オア・クイツにしようじやないか。』そして、彼等は  
何遍も勝負をした。

ネフリュードフさんの方は、だんく悪くなるばかりだつた。あの人は二百八十ルーブリ敗れた。  
フエードツカはどうかといふのに、彼はやり方をちやんと心得てゐた。普通の場合は敗れるが、賭物が  
二倍になると必らず勝つた。

公爵は、傍に坐つて、眺めてゐた。彼は場合がたいへんになつてゐるのを見た。

『もういふ！』と彼は云つた。『もう止した。』

しかし、二人は賭を増し續けてゐた。

たうとうネフリュードフさんが五百ルーブリ以上敗れたことになつた。フエードツカは撞棒を置いて  
云つた——

『今日は君ももう存分やつたらう。僕は疲れた。』と彼は云つた。

しかし、勝つべき金があつたら、腕方までもやらうとしてゐるのが俺には解つてゐた。無論、計略  
なんだ。で、相手はひどく氣を揉んで勝負を續けようとした。『やらう！やらう！』

『いや——實際、僕は疲れてゐるんだ。さア。』とフエードツカが立つた。『二階へ行かう、二階で君  
の復讐をやりたまへな。』

二階といふのは、みんながいつも骨牌をやる場所といふ意味だ。フエードツカは、その日から網を張  
つた。で、それから彼は毎日來だした。彼は玉突戯の勝負を二三度やつて、それから二階へ上つた——  
毎日二階に上つた。

二階でみんながいつも何をやつてゐるかは、誰も知らない。しかし、事實ネフリュードフさんはそ  
の日から全く別の人間になつて、フエードツカと親密になつたやうだつた。以前には、あの人は、氣  
取つた、小洒落した服装をして、髪を縮らしてさへるのだが、その時分には、あの人が本來のあの  
人になつてゐるのはたゞ朝のうちだけだつた。で、二階に上るや否や、あの人は全く本來のあの人で  
なくなつてしもふのだつた。

或る時、あの人は、眞青な顔をし、唇を顫はして、昂奮して喋りながら、公爵と一緒に二階から下りて来た。

「僕はあゝいふ奴を赦して置くことは出来ないよ。」と彼は云つた。「あんなことを云ふぢやないが、僕が。——その次ぎにどんな事を云つたか、俺は覚えてゐないが、何でも『上品でないなんて。』とか何とか云つたやうだつた——」そして、僕とはもう勝負をしないなんて。ねえ君、僕は彼奴に一萬ル—ブリから出してゐるんだよ。彼奴は、妙くとも他の人の手前、もう少し思ひ遣りがあつてもいゝと僕は思ふんだ。」

「あゝ、煩さいね！」と公爵が云つた。「フエードツカに對して腹を立てる價值はあるかね。」

「いや。」と相手は云つた。「僕はこのまゝには濟まされない。」

「ねえ、君、フエードツカなんかと同一視されるのは君の男を下げるんだと君は思はないかね。」

「成る程、それは解つてゐる、しかし、あそこには知らない人がゐるよ。」

「ふむ、それが何だね。知らない人？では、君がさうしたいのなら、僕が行つて、彼を君に謝らせやう。」

「いや。」と相手が云つた。

それから、二人は佛蘭西語で喋りだした。で、二人が何を話してゐるのか俺には解らなかつた。

人はこの事をどう思ふだらう。その晩、彼とフエードツカは一緒に晩飯を喰べるために坐つた。そして、二人は仲直りをした。

何は兎もあれ好かつた。いつか又、あの人が一人でやつて来た。

「おい。」とあの人が云つた。「僕はうまいだらう。」

誰でも知つてゐるやうに、誰でも彼でも満足させるのが俺たちの商賣だ、で、俺は云つた『はい、全くさうでございます。』しかし、彼は何の考もなしに撞棒でもつて球を突いてゐるのに、どうしてそれをうまいと云へやう。

ところで、あの人がフエードツカと連れになつたその晩から、始終金を賭けて勝負をしだした。以前には、決して物を賭けて、食事や三鞭酒を賭けて勝負をしなかつたものだ。時々、公爵が云ひくした。

「三鞭酒を一纏賭けて勝負をしようか。」

「いや。」とあの人はよく云つた。「葡萄酒は葡萄酒で飲まうぢやないか。おい！葡萄酒を持つて来てくれ！」

ところが、近頃ではあの人は始終金を賭けて勝負をしだした。あの人はよく吾々の店で終日暮らしだ。彼はいつも誰かに玉突場で勝負をするか、さうでなければ、『二階』へ行くのだつた。

俺は腹の中で考へた、他の者はみんなあの人の物を何か取つてゐるのに、どうして俺はそれがために得をしないのだらう。

「もし。」と俺が或る日云つた。「もうするぶん久しい事私はあなた様のお相手をいたしましたませんね。」そして、吾々は勝負を始めた。それから、俺が彼に五ルーブリ勝つた時に、俺は云つた——

「ダブル・オア・クイツにいたさうぢやございせんか。あなた。」

私は何も云はなかつた。以前には、あのやうに、そんな大膽なことをすると彼は私を馬鹿だと云つたものだ。で、吾々はダブル・オア・クイツをやり出した。

俺は八十ルーブリ彼に勝つた。

人は、それをどう思ふだらう。その時から、彼はよく毎日俺と勝負をした。彼はいつも誰もなくなるまで待つた。無論、彼は他人の眼の前で数取人風情と勝負をするのを恥に思つてゐたから。一度は、彼は勝負に熱中した（彼はもう六十ルーブリから俺に負けてゐたのだ。）そして、俺に云つた——

「お前が勝つたのを全部賭けちやアどうだ。」

「よろしうございます。」と俺は云つた。

俺は勝つた。「百二十と百二十で行かう。」

「よろしうございます。」と俺は云つた。

又俺が勝つた。「二百四十と二百四十で行かう。」

「それはあまり多過ぎやいたしませんか。」と俺が訊いた。

彼は返答をしなかつた。二人は勝負をした。もう一度、俺が勝つた。「四百八十と四百八十で行かう。」

俺は云つた。「もし、私はあなた様をひどい目にお遣はせたくありません。あなた様がお負けになつたのは百ルーブリといふことにいたしませう。そして清算にいたしませう。」

この時、あの人がどんな聲で叫んだか人に聞かせたかつた。しかし、あの人はちつとも高慢ではなかつた。「やるのか、やらないのか——」と彼は云つた。

さア、どうしていゝか俺には解らなかつた。「三百八十でやりませう。では、どうぞ。」と俺が云つた。

俺は、實際負けてやりたいと思つてゐた。俺は彼に四點だけ先きに取り置いて置いた。彼が五十二點、俺が三十六點といふことになつた。彼は黄ろい球を切らうとして、十八點失つた。で、俺は恰度分岐

點に立つた。俺は玉突臺の外へ球を突き落すやうに突いた。駄目だ——やはり運がよかつたのだ。俺

どがんなにしてゐたつて、あの人は二重の失策をするんだもの。俺は又勝つた。

「おい。」と彼は云つた。「ペートル。——彼はその時俺をペートル・シユカと呼ばなかつた——僕は一

時に金額をお前に拂ふことは出来ない。二ヶ月の間になら、もし入用なら、三千ルーブリでも拂へる

から。」

から。」

そして、彼は眞赤になつて立つてゐた。その聲は願へてゐた。

『よろしうございませうとも。』と俺は言つた。

で、私は撞棒を下へ置いた。そして、彼方此方を繰返へしく歩き始めた、汗が顔を流れ落ちてゐた。

『ベートル。』と彼は云つた。『もう一度やらう、ダブル・オブ・クイツで。』

そして、あの人は殆んど泣きだしさうになつてゐた。

『何でございませう、あなた様、何でございませう！こんな運の悪い時になさらうといふのですか。』

『あゝ、やらう、どうかやつてくれ。』そして、彼は撞棒を持つて来て、俺に握らせた。

俺は撞棒を取つた。そして、球を王突臺の上へ投げたので、球は床の上に轉け落ちた。俺は少し何気なく装はずにはゐられなかつた。俺は云つた。『よろしうございませう。あなた様。』

しかし、彼は出掛けて行つて、自ら球を拾ひあげた。それほど彼は急いでゐた。で、俺は腹の中で考へた。『兎に角、俺はこの人から七百ルーブリ取ることは不可能なんだから、元々通りにそれだけ負けてやらう。』俺は態と不注意にやり始めた。しかし、駄目だつた。彼はそんな事をするのを好かなかつた。『どうしたんだ。』と彼は云つた。『お前は態とまづくやつてゐるんだな。』

が、あの人の手は願へてゐた。球が囊の方へ行つた時には、彼の指は擴がり、口は一方に枉ぢ曲つて、どうかして無理にも球を囊へ入れようとしてゐるかのやうであつた。俺でさへ、見てゐるに忍びなかつた。で、俺は云つた。『そんなになすつても、うまく行かないでせう。』

まア好かつた。彼がこの勝負に勝つた時に、俺は云つた。『これで私はあなた様に百八十ルーブリお借し申したことになります。五十回勝負で、ではもう、私はあちらに行つて、晩御飯を頂いて参りませうから。』で、俺は撞棒を置いて出て行つた。

俺は出て行つて、入口の向側にある小さな卓子にたつた獨り坐つてゐた。そして、部屋の中を覗き込んで、あの人がどうするか見てゐた。まア、どうしただらう？彼は彼方此方と何遍も歩きだした。それから、髪を引張つた。そして、又彼方此方と歩いて、ブツ／＼獨言を云つた。それから、もう一度髪を引張つたのだつた。

それから、一週間の間あの人の姿は見えなかつた。一度あの人は思ひ切り酔ぎ込んで食堂へ入つて来た。しかし、玉突場へは入らなかつた。公爵があの人を見附けた。

『さア。』と公爵が云つた。『一勝負やらう。』

『いや。』とネフリードフさんが云つた。『僕はもう玉は突かないよ。』

『莫迦な！来たまへ。』

「いや。」とあの人は云つた。「僕は行きたくない。實際。君にとつては、僕が行つても行かなくても同じことだが、僕にとつては、こゝへ来るのは好くないんだ。」

で、あの人はまた十日ばかり来なかつた。すると、休日に、燕尾服を着てやつて来た、お客に行つて来たらしかつた、そして、終日こゝにゐた。ずつと勝負をやつてゐた、彼は翌日も来た。三日目には……

そして、以前の習慣に戻りかけて来た。で、俺はあの人もう一度勝負をすることになればいゝなアと思つてゐた。

「いや。」と彼は云つた。「僕はお前と勝負はしない。お前に借りてゐる百八十ルーブリは、月の末に來てくれたら、返へすよ。」

好都合だつた。で、俺は月の末にあの人の所へ出掛けて行つた。

「きつと。」とあの人は云つた。「あれは君に返へすよ。だが、木曜日にもう一度來てくれ。」

そこで、俺は木曜日に出掛けて行つた。あの人が立派な部屋を幾つも持つてゐることが分つた。

「あのウ。」と俺が云つた。「お宅でゐらつしやいますか。」

「まだお目醒めになりません。」と云ふのだ。

「さうですか、ではお待ちいたしませう。」

あの人の家僕は彼の家附の農奴の一人で、髪の白いお爺さんだつた。この家僕は、全く正直者で遠慮はしに物を言ふことを知らなかつた。で、俺はその男と話を始めた。

「ねえ。」と彼は云つた。「こゝでかうして暮らして何の役に立つてせう。主人と私とが。主人は財産をすつかり磨つてしまつたんでございますよ。だから、私どもが、あなたの方の住んでござらつしやるこのベテルブルグから他所へ行くのは、大へんな名譽なことでもありませんし、善いことでもありませんよ。私どもが田舎を出發します時には、亡くなつた殿様（どうか殿様の魂は安らかに休まつじやるやうに！）と同じやうなことになるんだらう。私どもは公爵様や、伯爵様や、將軍様と往來をするんだらうと思つてゐたんです。主人もお腹ん中で、『何處かの伯爵令嬢を戀人に見附けやう、その嬢はたいへんな持參金を持つてゐるだらう。俺たちは大仕掛に暮らさう。』なんて考へてゐたんでございますよ。ところが、主人が思つてゐたのは、全く別なことになつてしまひました。私どもは、こゝへ來てから、彼所の酒場此所の酒場と駆け廻つて、思ひ切つてひどい暮らしをしてゐるんですよ。ねえ、ルチシチーウア公爵夫人は、主人の伯母様ですよ、それから、ボロツインツェフ公爵は主人の母親ですよ。あなたはどう思ひますね？主人があの方々を訪ねたのはたつた一度限りです。それはクリスマスの際でした。主人は鼻さへのぞけないんですよ。さうです。で、あの方々の家の者でさへ、私の前でその事を笑ふんですよ。』どうして。』みんなが申すんですよ。『お前ん所の御主人は、お父様にちつ

とも似てゐないんだらう！」なんてね。で、一度私は自分で主人に申しました——

『どうしてあなた様は伯母様をお訪ねになりませんか。あなた様が永い間御無沙汰をなさいますから、皆様が氣を悪くすつてゐらつしやいますよ。』

『あんな所へ行くのは馬鹿けてゐるよ。デミヤヌイチ。』と主人は申すんです。まあ、一寸考へても御覽なさいまし。主人の慰み場所はたゞあの酒場だけなんでございますからね——主人が仕事をやるやうになつたらどんなにいでせう。しかし、駄目でございます。主人は、骨牌やなにかに氣を取られてゐるんです。人間があんな事になつてしまふと、何かにつけて良い事はございませぬや。良い事になりつこはございませぬや……え——ツ！私どもは犬になつてしまふんです。間違ひつこはありませぬ……亡くなつた奥様は（奥様の魂が安らかに休まつしやるやうに——）えらい遺産をお遺しになつたんですよ。農奴が千人以上、ざつと三十萬ルーブリの値のある山林でんですからね。主人は、それをみんな抵當に入れてしまつたんです。林木は賣り飛ばしてしまふ、所有地は滅茶々々にしてしまふ。そしてその上に一文無しでさア。主人がゐなくなつてからは、勿論管理人が主人より威くなくなつてゐるんです。彼奴は何をしてゐるでせう。彼奴のしてゐるのは、自分の衣囊へ填め込むことだけでさア。

『二三日前に、百姓が二人、所有地全體の苦情を云ひに参りました。』あの男は、財産を使ひ切つてしまひます。』と百姓どもが云ふんです。あなた、どう思ひますね。主人はその苦情で考へ込んでゐる

したがね。百姓どもに小金を十ルーブリ與りましたよ。主人がかう云ひました。『僕が直ぐに行くよ。僕は金を手に入れるから、歸つたら何もかも決算をするよ。』

『ですが、私どもは始終借金をしてゐるのに、どうして決算が出来ませう。金があつたのか無かつたのか知らないが、兎に角冬ぢうで八萬ルーブリかゝりました。それに近頃ぢやア、家ぢうに一ルーブリもないんですア。で、何もかもみんな主人が氣が好いからです。ねえ。主人は一寸比べる者がない位の天真爛漫な若様です。主人が零落しかけてゐるのもそのせいです——零落しかけてゐるんです。無一物になりかけてゐるんです。』そして、爺さんは泣き出しさうになつた。

ネフリニードフさんは、十一時頃起きて、俺を呼び込んだ。

『まだ金を送つて來ないんだ。』と彼は云つた。『しかし、それは僕の咎ぢやないよ。戸を閉めといてくれたまへ。』と彼は云つた。

俺は戸を閉めた。

『さア。』と彼は云つた。『僕の時計がこの金剛石の留針を持つて行つて、質に入れてくれたまへ、百ルーブリ以上になるよ。そして、金が手に入つたら僕が請出すからね。』

『譯はありません。』と俺が云つた。『お金のお持合せがございませぬたつて、御心配には及びませぬ。お差支がなかつたら、時計を頂いて行きませう。御都合が出来るまで、お待ちいたしますから。』

その時計は、三百ルーブリ以上の値があると俺は思った。兎に角好かつた。俺は百ルーブルで時計を質に入れて、質札をあの人の所へ持つて行つた。「私は八十ルーブリお借しよてることになります。」と俺は云つた。「それから、時計はお請出しになる方が宜しうございますよ。」

で、俺はまだ俺に八十ルーブリ借りてゐることになつた。

それから、あの人は又毎日吾々の所へ来るやうになつた。あの人と公爵の間はどうなつてゐるのか俺には解らない。が、兎に角、ネフリュードフさんは始終公爵と一緒に來た。さうでなければ、二人は二階でフェドーチカと骨牌をした。この三人の間には、何といふ奇怪な計算が成立つてゐることだらう。一人が他の者へ金を借す。他の者が又他の者へ借すんだ。しかし、實際金を借りてゐる者は誰なのかは少しも分らないんだ。

で、こんな風にして、ネフリュードフさんは殆んど二年近く吾々の所へ來て、明瞭分るのは、彼が變つた人間になつたといふことだけだつた。彼は時々人非人のやうな舉動をした。彼は時々、辻待御者に拂ふために一ルーブリ俺から借りるまでになつた。しかし、彼はやはり公爵と百ルーブル賭けて勝負してゐた。

彼は陰鬱になつた。瘦せて、眞青になつた。彼は來ると直ぐアブサントの小さな洋盃を命じた。何

か嗜つた。ポルト・ワインを飲んだ。そして、やゝ快活になるのだつた。

彼は或る時晝食前に來た。それは恰度謝肉祭の時だつた。そして、彼は或る騎兵と勝負を始めた。あの人はかう云つた。「何か賭けてやりませんか。」

『よろしい。』と騎兵が云つた。「どうしませう。」

『クロード・ヴーゴオを一賭。どうですね。』

『よろしい。』

ところで、だ。騎兵が勝つた。そして、二人は晝食をしに出掛けた。二人は食卓に坐つた。と、ネフリュードフが云つた。「シモン、クロード・ヴーゴオを一賭、いゝ鹽梅に温めてくれ。」

シモンが出て行つた。晝食が運ばれた。しかし、葡萄酒はなかつた。

『おい。』とネフリュードフさんは云つた。「葡萄酒はどうした。』

シモンが急いで出て行つて、焙肉を持つて來た。

『葡萄酒を持つて來てくれ。』と彼が云つた。

シモンは返答をしなかつた。

『どうしたんだ。もう飯がやがてお終ひだ、それに葡萄酒がないなんて。デザートと一緒に酒を飲む奴が何處にある。』



シモンが急いで出て行つた。「主人が。」と彼が云つた。「あなた様にお話があるさうでございます。」  
ネフリードフさんは赧くなつた。彼は食卓から跳び立つた。

「俺を呼んで何の用があるんだ。」

主人は、入口に立つてゐた。

彼は云つた。「御勘定が頂けませんと、もうあなた様を御信用申すことが出来ません。」

「いや、月初めに拂ふつてお前に云つたぢやないか。」

「それは分つてをります。」と主人が云つた。「ですが、御勘定を頂かないで、始終お借し申す譯には  
参りませんのでございます。もう一萬ルーブリ以上そのまゝになつておりますので。」

「うん、よろしい、君、僕を信用してもいゝぢやないか！酒をよこしてくれ、間違ひなく、直ぐに  
拂ふから。」

と、主人は急いで戻つて行つた。

「どうしたんです。どうして君を呼んだんですか。」と驃騎兵が訊いた。

「いや、誰か僕に訊きたいことがあるといふんです。」

「もう好い時分ですね。」と驃騎兵が云つた。「温かい酒を少し飲んで。」

「シモン、大急ぎ！」

シモンが歸つて来た。しかし、やはり葡萄酒は持つて来ない。何にも持つて来ない。あまりにばつ  
が悪いんだ。彼は食卓を立つて、俺の傍へ来た。

「どうか。」と彼は云つた。「ペトルーシニカ、六ルーブリ貸してくれ！」

この人は紙のやうに蒼色くなつてゐる。「いけませんよ。あなた。」と俺は云つた。「實際、あなた様は  
私に少し借り過ぎてお出でになりますよ。」

「一週間のうちに、六ルーブリを四十ルーブリにして返へすよ。」

「持つてゐればお借ししますがね。」と俺は云つた。「お辭りしたくはありませんが、持ち合せがない  
んです。」

どうだらう！彼は、ひどい勢ひで立去つた。齒を食ひしぼり、拳を握り締めて、狂人のやうに廊下  
を降り去つた。そして、矢庭に自分で額を一つ叩いた。

「あゝ！」と彼は云つた。「とんだ事になつた！」

しかし、彼は食堂には歸らなかつた。彼は馬車の中へ飛び込んで、駆け出した。それを見ていると、  
笑ふことも出来なかつた！驃騎兵が訊いた――

「僕と一緒に食事をしてゐた人は何處へ行つたね。」

「お出かけになりました。」と誰かが云つた。

「何處へ出かけたんだらう。何か言ひ遣して置かなかつたかね。」  
 「何もお言ひ置きはございません、あの方は、たつた今馬車にお召しになつて、お立ちになりました。」

「妙な人の響應振りもあるもんだなア」と騎兵が云つた。

で、俺は獨り考へた。暫らく彼は來ないだらう。あんなにばつの悪い事を仕出來したんだから。ところが、さうでなかつた。その翌日の夕方、彼はやつて來た。彼は玉突場へ入つた。手に箱のやうなものを持つてゐた。彼は外套を脱いだ。

「さア、一勝負やらう。」と彼は云つた。

彼は、肩の下から覗くやうな、やゝ狂暴な眼容をしてゐた。

吾々たちは勝負をした。「もう充分だ。」と彼は云つた。「行つて、ペンと紙を持つて來てくれ、手紙を書かなくちやならないから。」

何も考へずに、少しも疑はずに、俺は紙を持つて行つて、小さな部屋の卓子の上に置いた。

「用意が出來ました。あなた。」と俺が云つた。

「よし。」あの人は卓子に對つて腰をかけた。あの人は始終何か獨言を呟きながら、書き續けた。やがて跳び立つて、顔を擧めて、云つた。「僕の馬車が來てゐるか見て來てくれ。」

その日は、謝肉祭の金曜日だつた。で、お客様は誰もゐなかつた。お客様はみんな何處かの舞踏會へ行つてゐた。俺は馬車を見に出かけた。と、入口を出ようとする、と彼は、「ベートルーシユカーベートルーシユカーと！」不意に何かに怖れたかのやうに叫んだ。

俺は振り返つた。あの人は紙のやうに青白くなつて、立つて俺の方を見てゐた。

「お呼びになりましたか。」と俺が云つた。

あの人は何にも云はなかつた。「あゝ、さうだ。」と彼は云つた。「もう一勝負やらう。」

そして、彼は云つた。「僕はかなり旨く突けるやうになつたらう。」

彼は、恰度勝負に勝つたばかりだつたのだ。「さうでございますよ。」と俺が云つた。

「よし。」と彼は云つた。「さア、行つて、僕の馬車を見て來てくれ。」彼は部屋を彼方此方歩いてゐた。

何も考へずに、俺は入口へと降りて行つた。馬車は一つも見えなかつた。俺は又上へあがりかけた。

俺が上へあがらうとした時、撞棒がバタリと云つたやうな音が聞えた。俺は玉突場に行つた。妙な

臭ひが鼻についた。

俺は見廻はした。と、そこには彼が血を流して床の上に倒れてゐた。傍には拳銃があつた。俺は一

言も口が利けないほど驚ろいた。

彼は、断えず足をビク／＼動かしてゐた。それから、少し身體を伸ばした。やがて、彼は駢のやう

な聲を出して、妙な風に身體一ぱいに伸びをした。で、どうしてこんな悪い事になったのか誰も知らない——どうして彼は自分の生命を捨てる氣になつたのか——しかし、彼が紙に書き残したものを見ても、俺にはそれが少しも解らないんだ。實際、この世界に起る事を説明することは到底出来ないだ。

「神様は、人間の願へるすべてのもの——富や、名聲や、智識や、高尚な希望を私に與へて下さつた。私は自ら享樂したいと思つた。そして、私の中にあつたすべての最善なものを泥沼の中へ踏潰してしまつた。私は不名譽な事をしなかつた。私は不幸ではなかつた。私は如何なる罪をも犯さなかつた。しかし、私はよれよりもつと悪い事をした。私は自分の感情や、智識や、青春を滅茶々々にしてしまつた。私は穢れた網に捕へられて、それから逃れることも出来なかつたし、それに自ら馴れることも出来なかつた。一刻々々自分がだんぐと陥ちて行くのを感じながら、踏み止まる事が出来なかつた。

「で、何が私を破滅させたのか。それで自分を辯護し得るやうな不思議な情熱が私のうちにあつたのか。さうではない!

「私の追憶は愉快なものである。私の心から拭ひ消すことの出来ない或る怖ろしい怠慢の瞬間が、

私をして正氣に返へらさうとした。底の知れない深淵が、自分がさうありたいと望んでゐた所のものや、さうなり得たかも知れない所のものから私を引離すのを見た時に、私は戦慄した。私の空想の中に、いろ／＼の希望や、夢や、青春時代の考が起つた。

「時々光明と力を以て私の靈魂を充たすかの生命や、永遠や、神といふ高い思想は何處にあるのか。その快い滋味を以て私の心を燃やしてくれたか、かの愛といふ目的のない力は何處にあるのか。しかし乍ら、若し私が、人生の門出に私の新しい心や純眞な感情が指示してくれたかの道程を歩んだならば、私はどんなに良く、どんなに幸福であり得たであらう! 私は、度々、自分の生活が導かれてゐる。軌道からかの聖なる道程へ行かうとした。

「私は、自ら思つた。今こそ自分の意志の全力を用ひるんだぞと、しかし、私はそれをなし得なかつた。自分獨りゐる時、私は見苦しさや臆病とを感じた。他人と一緒にゐる時、私はもう内心の聲を聞かなかつた。そして、絶えずだんぐと陥ちて行くのを感じた。

「終に私は、低い平面から自分を高くするのが自分には不可能だといふ怖るべき信念に到達した。私はそんな事を考へるのを止めた。何もかも忘れたかと思つた。しかし絶望的な悔恨が、やはり前よりも一層強く私を苦しめた。そこで、初めて、自殺の考が心の中に起つたのだ……

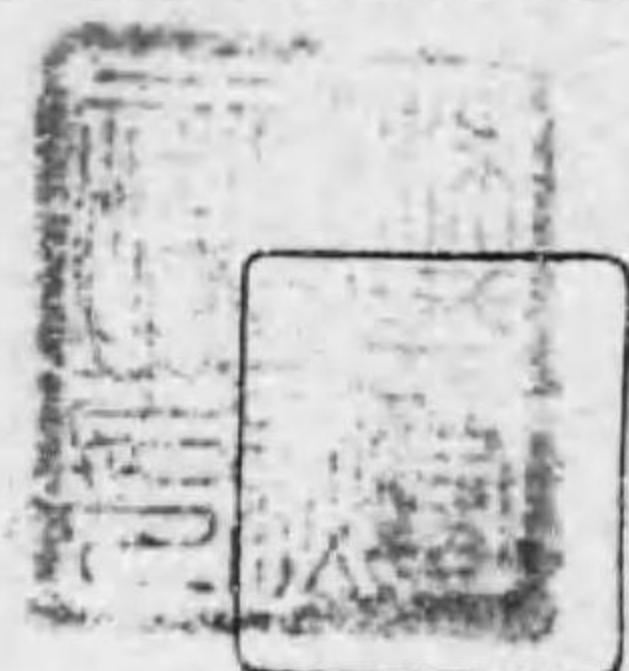
「曾つて私は、死が近づけば自分の靈魂が目醒めるだらうと考へたことがある。私は間違つてゐた。

記手の人取ムーゲ

二十五分間の中に私はもうなくなるだらう。しかし、私の考は少しも變らなかつた。私は同じ眼を以て見、同じ耳を以て聞き、同じ考をしてゐる。私の心の中には、同じ不思議な支離滅裂と、不定と、軽さがあるのだ。……(完)

大正十一年八月一日印刷  
大正十一年八月貳拾六發行

定價金七拾錢



トルベリア

譯者  
發行者  
印刷者  
印刷所

福永挽歌  
神田豊穂  
東京市神田區表神保町十番地  
小島爲吉  
東京牛込早稲田區卷町三六二  
早稲田印刷株式會社  
東京牛込早稲田區卷町三六二

發行所

東京市神田區表神保町十番地

秋

社

電話東京二四八六一番  
電話神田二一三八番

506  
209

西田天香著

(好評百五拾版)

書叢園燈一

# 懺悔の生活

四六版四百三十頁  
背布函入堅牢美本  
コロタイプ版二葉  
定價金貳圓五拾錢  
送料金拾四錢

▽一絲響を發して萬管これに和  
す。本書を讀みて斷然家業を廢止  
したる娼家の主人あり。虚飾の生  
活を脱して十字街頭奉仕の群に入  
れる少女あり。鹿ヶ谷一燈園は新  
來の求道者にて充満す。靈界嚮導  
▽永末に道隱れ、言ふ乎。書架の  
光一卷の本書あり。争へる親子  
にも相親しむ。仲隔たれ。夫婦も  
睦み、此の世乍ら。天國淨土、家  
庭の中に實現されん。

▽洛外鹿ヶ谷に褐衣繩帶の一團あり、名けて一燈園と云ふ。同人は一物半銭を所有せず、常に懺悔の心を持って十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞す。その園主を西田天香氏となす。  
▽天香氏とは何人ぞ。嘗つて倉田百三氏の名作『出家とその弟子』が一世の讀書界を動かした時、一部の人士は作中の親鸞と唯圓とを目して、暗に天香師の心の兩面を材としたるものと噂し合へり。吾人は茲にその當否を斷ぜず、只、倉田氏が西田師に私淑する事日久しきを言へば足る。  
▽網島梁川氏は十數年前豫言して言へり。世は自らにして西田氏を知るの機あらんと。本書は西田氏を初め一燈園同人の行事逸話等を紹介批判せる一個の新らしき使徒行傳也。

終